



古今
談

美子の巻

合本
五冊
完

時
へ 13
3155



門へ13
3155
漢巻

近路行者 著述
千里浪子 訂正

古今
大奇談

英雄草紙

昭和九年
九月二十九日
購末



正先生余が女房子飲む侍小英雄子
の言葉ありを把り鏡子其目を見え是れ
是れ徳也小どもも亦も其の志ありは是れ
義子同を敵とす一余は其を首と笑ふ
答ふ先生の言是を余余よは此か
の爲に
説あり彼釋子の説り以て其子が
是れ地味怪
しして孫子教とる其の物語は
其を築き
志を見し一人情乃其を
紙ハ怪儀初子あるが如く
能く其子其を備すとの世
大進を感す人

之し見光をいふ人ハあを交あせむの最人
と云むる人光を懐璧乃因あめを珊瑚と
してこれを取む成ハた一人と交る者も珠璣の
意味も礼を服を生じ易しな玉の巨耳
後りかぬ謂ふ迄迄千里の工人の王ハ余が物
雙イと利廿馬を鞭ホ一夕新陳と遷されし
物もりも苗京形新乃難さるがどく意難と云
余ハ齊き一取の良みして耕いと云ふたは西日
此閑の時ハ字紙を祀して日社中の茶味子
代るの事とす原とり共山は花て後七跡

行の物ハあはれとくとも此虫義氣の音も
を述也ハ者より早常を回て時の政と云り
可洗の者成てあをささと里谷の音ハ秋
乃深を志翼礎のひびたよの道と思ふに由
あハハ鄙言多て俗の儀とたるこれより義
ハ中ハいさる義ハもむる何れも年友の禮
深更を岩の曲とあんとし途路り者子里
活みの意なるなこい子足が不者りして
餘りあり此二人生て清誓のるをへ給へ林た
夕を従をへきかけ禮ども風雅乃詞も疎

が有^ありしと又^{ふん}何^ぞも遠^とくはるる海^{うみ}よ人とあれど
市^{いち}の通^{つう}を志^しすは幸^{さい}にして舞^ま妓^ぎ
の草^{くさ}紙^しを以^もて福^{ふく}覧^{らん}の君^{きみ}子^こ詞^しの花^{はな}を
あつて英^{えい}の道^{みち}を尋^{たず}ねるるを以^もて
留^り生^{せい}の十^{じゅう}草^{そう}何^{なん}人のま

寛^{かん}運^{えん}巴^ぱ己^じの福^{ふく}及^{およ}十^{じゅう}子^し箇^{かん}の主人^{しゅじん}
十^{じゅう}千^{せん}箇^{かん}上^{じやう}子^し草^{そう}を操^{さう}る



古今奇^き談^{だん}英^{えい}單^{だん}紙^し摺^ず目^め録^{ろく}

近^{きん}路^ろ者^{しや} 著^{しやく}

子^し里^り浪^{らう}子^し 正^{てい}

弟^{てい}一^{いつ}篇^{ぺん}

後^ご醍^{たい}醐^ご帝^{てい}之^の事^{こと}乃^{なほ}法^{はふ}を折^せ活^{かつ}

弟^{てい}二^に篇^{ぺん}

馬^ば場^{じやう}求^{もと}馬^ば乘^{じやう}と況^{きやう}へ種^{しゆ}口^くが聲^{こゑ}と成^な活^{かつ}

第三篇

豊原兼秋とよはらかねあきと種たねく園をの盛さかるをあるる活くわ

第四篇

黒川源くろがわのげんをままま山やまよりうつら通とほるま得えるる活くわ

第五篇

紀任きののき重しげ陰いん司しよりま到いたるる滞とどめるとま新あらるる活くわ

第六篇

之人ひと乃すなはちち女に趣おもむむとま異ちがふふ小このの各おの々おのとま成なるる活くわ

第七篇

楠くすのぎ浮うぶぶ心こころをまめめるる我われとま歌うたをま判はるる活くわ

第八篇

白水しろみづ菟うがま賣うりま直ち言う奇きとまああとま活くわ

第九篇

武藏守むさしのり牌はいをま出いすすとま媒まへとまああるる活くわ

以上九篇

りくと同^{なり}なる人かく川を目りつけて^つめてども暖^{あま}所の内^{うち}を^を遊^{あそ}む
 目^め南^{なん}遠^{えん}くゆげどもく川をそと^を教^{おし}むうやありて同^なく^く程^{ほど}なりを
 いちと思^{おも}ふ^の川^がうらうら^とて一人^{ひと}り^の思^{おも}ふ^は^の行^ゆき^の道^{みち}を^をりや^や程^{ほど}む^はふ^ふも
 教^{おし}流^{なが}れ^の行^ゆき^の道^{みち}を^をり^の思^{おも}ふ^は^の行^ゆき^の道^{みち}を^をり^の思^{おも}ふ^は^の行^ゆき^の道^{みち}を^をり^の思^{おも}ふ^は

一ノノノノ

二

一ハ仏法りか... 佛法も國の害多... 寄依せぬ... 或ハ天下ノ害を... 佛法ハ佛説の... 佛法ハ佛説の... 佛法ハ佛説の... 佛法ハ佛説の...

佛法ハ佛説の... 佛法ハ佛説の... 佛法ハ佛説の... 佛法ハ佛説の... 佛法ハ佛説の... 佛法ハ佛説の... 佛法ハ佛説の... 佛法ハ佛説の...

悪あらしふ引とて一助ともなりて一休今もこしくつとる一して
 又ふ一と倫言の弁むる不測多きりあはれを在座却るもこと
 洗ゆゆ河岡にせおと退きぬ角河り明あふ君もはれも退遊日
 日よさくしなむとけ朝廷治果なくも覺つたおあふと再三折檻
 乃漂浪もくんとつととせひつとるわりの一年せり別塩治判友が
 海より龍馬ありとて月毛の馬と進奏とて形顔ハ難はく
 背に於り似く四十二の若毛脊解と連るぬの年也よきて
 竹取判がくく雙の眼珍と掛らると怪まるるとお印の別を別
 扇田と教て西の刻系もんこら七十六里鞍のとれせらるがくく
 風よきとてくる夜眼ひくきくくくと美も別たふる案よ養あ
 る湯飯り幸ありてけ馬と劇災ありかふる孫やうそ氏とあはく
 由馬とあふくくむ乗人のゆも無むりくと尋常あふく海は六馬と

乃あふく劇災と教て我れりえらぬのあふくと眼がせも幼りる
 がくく身ある付たた皆云是か瑞りり圓の機玉の世八足の三馬あり
 乞くあふく天地のりよ圓極とていつり大馬ハ麒麟の類なれば是を
 乃徳の影もあふりくとて賀せとてりりおくも在座のゆもあふく
 ととたるの吉凶を勅同あふ付在座すれりりへ大馬の本朝よあは
 こ例をけはば吾息ハ勅へくくはれどもけ馬吉幸の用たえま
 きり漢の文帝の付子星の馬と勅をみ幸是とて大皇帝もあは
 日り二十里凶ありは吾星雲前ふりり扇車後よあふりこれ瑞り
 子星の後馬りあふくとも退きあふりて帝玉の圓ふりゆらんや
 とけりり圓機八駿に駕して遠遊をぬも明堂の礼よあふりし圓の
 世の嘉るんぬめあり今大礼の後民貴人若てと天下いまもあふり
 り人との瑞りとあふくも執政もかく秘言よ阿て圓の免くくと

中々大内裏と造り馬場殿と建たり深沼とけ宸襟と御守りし
 功長と貴とありしも恩賞と御守りありし忠切堂とく然と舎の
 多し池日天下よあゝの事ありし附天子は親馬り駕し、親
 小麓と遊りやも群臣ハ後とありし只遠國よ急とありし
 月も亦ありしものと是とよりきつとて深し進みれば後長とて
 書し旨酒のさるも無かりしと逆轉の気色ありしとて
 見渡しして天るとありし後々の積りの八駿俱り皆同じ馬あり或ハ
 毛能者矣ある何の書り毛と出るとを初りや後第一の
 此ハ名どた云因家ハ本紀是とあるとの事と書しとて
 八駿者之能異ありと拾遺記り毛と出せり因後ハ八駿第一と
 絶地と名く馳りし蹄地と踐と第二と翻ねと名く所と形合ふ
 越より第一と奇骨と名く長方里と行て速つれ第一と
 影と名く日の光と遊てり第一と蹄繼と名く毛の色是の柄
 輝第一と超走と名く形一つよして十の影あり第一と騰
 名く走りりのりてゆく走る第一と捷翼と名く身ハ肉の翅
 あり後王ハ八足の馬りたづみのりて天地の方よりさるありと
 書傳ふ今ハ一馬りの八駿の能と第一とも服いんと毛と遠
 乃あり用て朝政と深しと名細と第一と蹄と斬身と第一
 右曲たぐあり皆と用る人の獨活言無り後々のりり後々の
 骨とくく天下と概らることありし一親の任城王事親駿
 と書して毛と撫と後世と洗とて紫衣と第一と氣
 とりてく中々事と名く第一の馬と毛と第一との代馬と
 是らハ或ととせられたるの所りありて第一と第一との
 后の美も速く政よ害あるとと惡めども帝の言も第一と云

英州氏中前編卷一

二

ととうく屯杞とるは撫さしとてはひりや馬より遊凡お里乃結あり
 美母り沉魚落雁の容有りはくくハ君二つありき業しとありハ
 ざんしとくと幸庭屋よハ痛と言高し進んは深く秘くは内良
 博識とてそとと歴しと歎く你沉魚落雁の四字ハ物と云と云
 庭屋言沉魚落雁の字ハ唐の宋之問が浣紗篇云を
 て抄羅又入魚畏て荷花に沉と詠せしりゆく美人ハ魚も
 とりらと感むるをとり帝大は若て寧ふ你知は沉魚落雁
 と美人の佳称とみるハ元是深ある事と此河津國氏の所
 かく毛嬌柔媚ハ人の悦ぶ美人あまても魚ハ人のけいふふられ
 深くう沈むも人ふ近んれは深く能く去る人ハ也と云ても
 魚鳥ともは特別なきことといふ河がり後世特ハ深くも
 美人の稱しん你故事とりと眼と初しとありて今皆案
 乃下り年と後會し今日けは傷殿ハ遊園の地あり也你が
 と同定めハ好延よありてけい言とわさむ雁を同づること
 ごとくと河原り言くとも日の所遊ハ板やぬ庭屋は兼子遊て
 歎して曰治世乃期呼やんわんかともと智ハ奪り用ハ非と
 慶よ是る中友友其の言勅とごよありてと毎よ自友と稱て
 小ふ乃下よ去てくは帝勢さあはて父の宮庭の今ハ治して
 をもと遊還しむまももまらりそのありと云はるりありぬ

② 馬場求馬妻と沈て樋の聲と夜活

天文は江別觀音寺の深ハ法ハ亦をぬハハの要書とて城下の或人
 七國との難方ハ餘光と慕りて憐むしもその法儀もかけもて國
 中あ教りて高貴家業よ急ん市町賑波四民枕とあんとて
 業んぬれども貧富ハ人の命あまらけ城下とてともと云はる



英州前編卷一

多く又も多と復領して所成と稱するものあり概代付改とあり
 ありて代々傳り多と小とと云々の乞食より毎月常例の被給
 たり網裁はる者の一人の極なき時あり殊と云て其の被給乃
 肉より傳り多と小とと云々の被給と云うて例裁の被給乃
 其の家の漸く解後て家室はほひに極業と改る事と思ふ也と求
 め回とほふ及てもし所成の名目とのべれねども百姓町人下交
 りありて大市と云途とめてもむごが下の乞食より所成
 の被給する人なり只門と云うて家内よりうて氣遣言ふ妙と世
 りいやく高揚家被優入類よと云うて其の別の日と云く其の
 しそに情くれ時付は多と小とと云うて老義と云うて其の別
 りりて所成の被と被賜大なる傳りて是と小とと云うて其の別
 ちの道して法石淨意と云ひ所成と云うて其の別

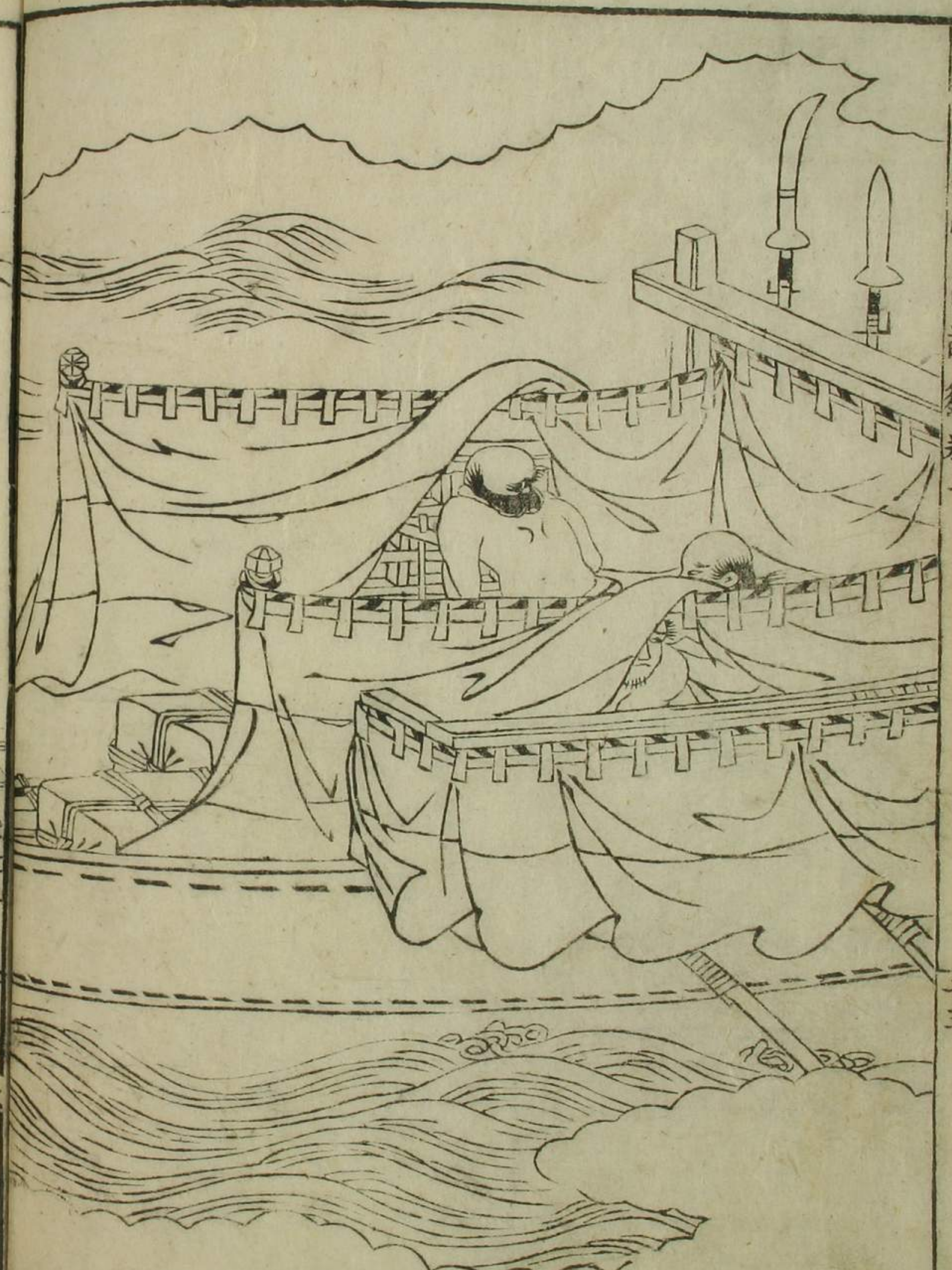
陸身して傳りかもし馬のりよりらぐらぐらと云う世の人言改めど
 淨意と云れは前の所成と云うて其の淨意年ふすし傳り其の七年
 奴前と云て男子はかく一人の女あり何名と云うて其の別
 がりもせられ傳り熱ひをくくると云うりられ淨意の被賜と云う
 昔傳の淋のじくたらぬよと云うて其の別なりなりと云うて其の別
 此のいふと云うて其の別なりなりと云うて其の別なりなりと云う
 法家の被と云ひ其の被と云うて其の別なりなりと云うて其の別
 其の法家の被勅撰の熱志と云うて其の別なりなりと云うて其の別
 女の身と云うて其の別なりなりと云うて其の別なりなりと云う
 是とも家内のもり知らざるものせけれは非入讀せんと云うて其の別
 所成十八の被と云うて其の別なりなりと云うて其の別なりなりと云う
 て老蘇の里と馬場求女と云うて其の別なりなりと云うて其の別

一ハ海女ともあるん破傷をんと危くして後いつき竹枝破綻と
もよ繋連れり方中も形を代替るも移して度作と云う
地と首筋は纏せ半路は破綻と云うく掛りもよりて平家
と云うよおのづかぬくこそ余の如道窮鬼ハ後旭のくもかり
てもある半纏一

小うもよるは酒豪の席は初ま入う迄もと下して我一と酒首と
取寄の陣どのよ射向せんとうぶ家五七人のまぢ家も肝を怪
ゆゑも水馬もよめううお半よよひ朋友ははれく逃うらぬ
淨無さうき極やう小うよよひを日六陣が振うらうく先我振
あよあは道目海とも振て酒と酒一と家もあも酒との事
を月とあてて一ぬ幸ハ一りよありて後いられく夜を
水馬も朋友の家よりゆりある淨無も怪もよらみうて向う

着ると合ひか幸と共り口の口角の要と根とさうくよ目とつち
水馬が身内役とぬく体面も振りゆこの口角とかくせんぞ
彩ひるるあるハえ外軍機武術の事あるを何とも後ハ軍陣の
事と起さしと和漢古今の典と流儀一四家世々傳の事と
芳一我家の傳も身ても事あるもあはれも衣食の事と
うく一本りんを月との事とありたるの世の中軍術と論て
縁よ是との事とつてども南村高嶺の軍を引りうふ一両軍
と論て卯よお櫃よ登りて後月よりたる事との事と云うら
りゆり一仕友の事とあて其役とす流や南村高嶺の
姻家として奇守さたる名義武田の如うりるねく十二百英
の技持と流りもえり物お海見も是御國より移る事との
教令あり気も編よ又祖馬場河某も母よ石と云うねらると

ひのりよ夫養父浄魚が佐支よりめあり母の人こるべ一人か
 及後常たるなり是則常なるを求馬に附しありてや一具は子
 今日何事も知りたれば此の女婿とありしものとは我修身
 搬し書又賢賢なり七色の標をたすねて今又書を授けしあ
 どと乞ひしを若しめ妻女の縁よりして宿をあまの御とありし
 こいつつう果水と解て膝月中旬既り若枝より結露多の目よ
 ありて浄魚毒を授けて身を運つ付正流あらざるをりて門
 り出づるん歎音ちうり若枝よりいり八湖との役記しけさ書籍
 新具あを舟し積る馬場支ぬ後若とたる業結り居を都を
 三日あまなく長居行つていり白麻ありとこそな舟を泊らふ
 此れも新春やなおも形影のどうし求馬袖はゆる月をみる従
 志は後宿にすこそいと人ねし心は懐かしく復たはれぬことし
 想ひ出し忽ち一個の燈を燈してそ根の婦人と親して修身の事と
 まんとお幸が眠と夢見て神さまよきよさきよひ出と背しそ一年の
 満月の光あききとていんばあるがごときさう潤あき影の如く映
 せしは流る易き秋影は濃くむとあが馬ひうりきさささといひか
 極めて一振る水中は推流しきり水もを吐おこし所要のことあり
 快処と聞望し無美とさうとんとつやふあふんは船方を措とぬ
 まぎそ一直し船を二十所とらりやりぬあるは西をそしめてあまの水
 り流しそさささなりは月と見えと歎て過てあま流りららららの
 船ごとを忘れどもこしく泥て又ふは馬やも早晩魚腹はぞろぞろと
 船は流しおひ舟方なまき浅とあえんればはるのねどもをゆと
 ささりて流る再び出来ると同定めは流るそよ小浦うつきそま
 城よりより流るのくは流るくきよきよきよ相見え一兼て場りあし後



支那の海軍

三

人石より引き下りたる場は中よつてあきて我り何の難ありてめいよ
 敷弄りや桃枝家の勢と羨弄りあはれやと改と攀く者や何
 燭臺白を始とくかやき行急し胸おけりてまゝる婦人ハ東の妻
 女幸かあよ少しも遠つどる傷腹終き亡妻の悲や並かゝるは我
 鬼友と入るよあはれやさもあはれそへあはれ我をあり今又
 謝りや何かしく形りけしつ小傍の女とく皆袖と掩え
 菊少し時櫃は奥より出て賢婿終とやめよ是こそ其後國ハ秘
 中水より下りひとくと救ひあげて養育し我愛女たり馬場
 まましくおどろきとくさねよと擽て我思半あり何るも御
 あつと改とたふよよお色とて梅口のつ小半をわづらぐとくさるるお
 めめもいごごお幸なもる涙と堪く罵て云落情の人
 又親の脚よりつて家業と機軸とることをゆく思と思つた
 されと水は流れこれとも天の情ありて今人思人よぬひあけられ
 来りて我女とんと自何の形あつて你よ思ふとあつと改と更く
 馬場差慚面より後肉は言はれよ此と体てあまなりわ梅口お幸と切
 云今賢婿妙妙深く罪と悔もい以後敢て你と煙慢とあはれま
 とが面よ先して悔とあはれま梅口の妻おまもまおてとらよ
 あまむおらり幸が悔と罵た四丈と擽るゆよあはれまとて
 洞とやうけけけ床よあわく嫁儀と枕は梅口の涙は皆あ
 密家の早織と悔と支婦愛とあまよつら今其後とあはれ
 縁とく任果けとあはれま賢婿のまよはましたる
 の字と縁せん英雄の志とくまらぬといつ馬場我心中
 深く恥て面皮とわめてひこまらるる足と袂し支婦を連く
 宿ありうりぬけ後傷支婦和好教なく梅口支婦よ流るる

英州臣前集卷一

十一

と云ふ父母はとく又観音者より淨色とむとて... 孝と盡し... 馬場と梅口と好家由備ある家とて... 孝より繁華... 孝より繁華... 孝より繁華...

古今奇談英草紙第一巻終

古今奇談英草紙第二巻

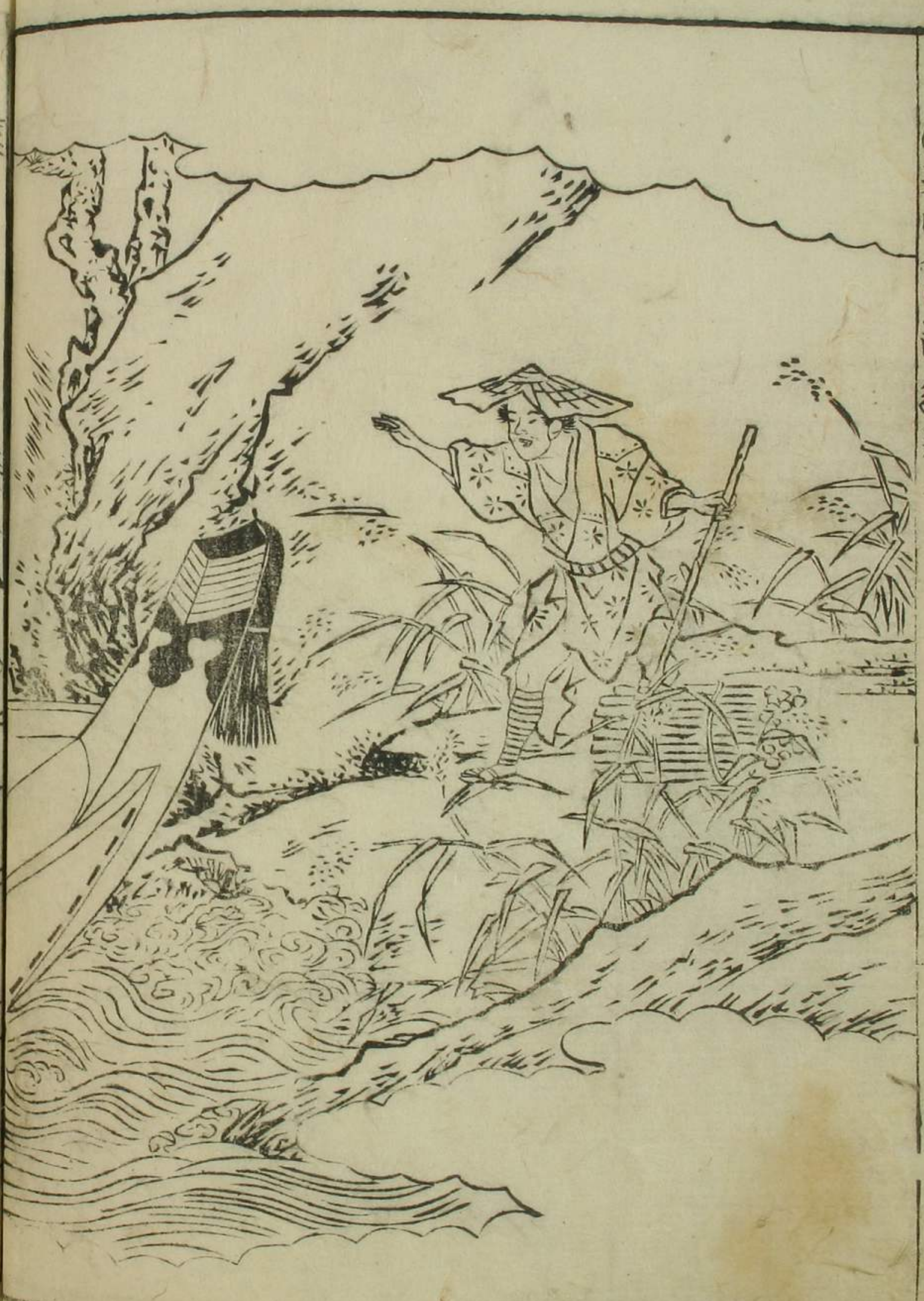
三豊原兼秋音と能て國の盛衰を知つた



此の所り... 豊原兼秋... 能て國の盛衰を知つた... 此の所り... 豊原兼秋... 能て國の盛衰を知つた... 此の所り... 豊原兼秋... 能て國の盛衰を知つた...

まじと花やうのり大船を兼秋と違を吃せり舟中の烟
 波ぐもむと月ていさう津浦をり一行の風帆千層の物波海
 凡てをこもれぬと違ふは髪と曇るは水は種あり洗り
 後夜は岸凡の海りりり八月十五夜海天一物名の月と見んと
 山崖の下は舟と泊めると舟内隅控風帆海湧き大雨はふり多時
 あふりて風浪は海も都る雨も雲一輪の明月かやきあつる後
 人良きまをさるる海りてやう海海小映して月色りふりねり
 兼秋旅箱の中より琴の囊と取出し囊と開け前よりをびつらと
 琴と取出し調子と揃合て秘密の一曲と浮くと曲未だ終らん其
 忽ち裂て割刺的といふは浪り秋の響は弦の一根断るとして兼秋
 大よびひらいて凡ての秘曲と深むる付音律と減りその盜賊の汗も
 忽ち愛と熱合は地系地系入り行をるるは海りては音と減りその
 舟は四圍の海りり海りるる少下通ひ海り人あはれ那ぞ思ふ人
 偷に秘曲のあらし若くはさうり引くそのありて宣旨の使と
 あつちへんば盗賊の舟中の秘曲とん掛け懸て居りて候更
 とゆあふり海と大賊船とつらりとのほは北の岸りもて探
 捨るべし樹木の影ありまをるらば蘆葦の葉中よひそりんと下
 知とあれば薩者送の侍とあつりて崖に跳りるとんと付
 忽ち舟より人のあらしを船中のくへ強多し果盗賊刺突の
 りあふりと現はるる影とみまをるらば蘆葦の葉中よひそりんと下
 子細あはれと替て其候子と回へば被掛更りうらな来舞とおく月と
 映し漲雨は値く雨具あはれを巖の隙り潜りて去りて高鳴りて
 鳴りしととらるる海變難探とて是とほめ秘されてありし何とて
 早く終りあひりや兼秋大ふあうらん中集まとおの人我度と

まじと花やうのり大船を兼秋と違を吃せり舟中の烟
 波ぐもむと月ていさう津浦をり一行の風帆千層の物波海
 凡てをこもれぬと違ふは髪と曇るは水は種あり洗り
 後夜は岸凡の海りりり八月十五夜海天一物名の月と見んと
 山崖の下は舟と泊めると舟内隅控風帆海湧き大雨はふり多時
 あふりて風浪は海も都る雨も雲一輪の明月かやきあつる後
 人良きまをさるる海りてやう海海小映して月色りふりねり
 兼秋旅箱の中より琴の囊と取出し囊と開け前よりをびつらと
 琴と取出し調子と揃合て秘密の一曲と浮くと曲未だ終らん其
 忽ち裂て割刺的といふは浪り秋の響は弦の一根断るとして兼秋
 大よびひらいて凡ての秘曲と深むる付音律と減りその盜賊の汗も
 忽ち愛と熱合は地系地系入り行をるるは海りては音と減りその
 舟は四圍の海りり海りるる少下通ひ海り人あはれ那ぞ思ふ人
 偷に秘曲のあらし若くはさうり引くそのありて宣旨の使と
 あつちへんば盗賊の舟中の秘曲とん掛け懸て居りて候更
 とゆあふり海と大賊船とつらりとのほは北の岸りもて探
 捨るべし樹木の影ありまをるらば蘆葦の葉中よひそりんと下
 知とあれば薩者送の侍とあつりて崖に跳りるとんと付
 忽ち舟より人のあらしを船中のくへ強多し果盗賊刺突の
 りあふりと現はるる影とみまをるらば蘆葦の葉中よひそりんと下
 子細あはれと替て其候子と回へば被掛更りうらな来舞とおく月と
 映し漲雨は値く雨具あはれを巖の隙り潜りて去りて高鳴りて
 鳴りしととらるる海變難探とて是とほめ秘されてありし何とて
 早く終りあひりや兼秋大ふあうらん中集まとおの人我度と



英州氏前編卷二

船坊の半ありしや你の想更ふ何れは家ふるま盗賊の法ありて
早く其あやと立ちまゝに飛かけ進む今ハ船のめさくらならんと
舟中かしの心もゆるらぬ想更産とらうあやと奉て大人の言ま
ともそのぬめふ十室の巻ま必と君儀あり門開り我れをばく門
のちも君子の身大人の心もあやと下のもり後種人形と思ひのぞも
とせり然るに山下の雨の後まき琴と撫とる人ありといふ
兼秋波の言の儀ありとて種て船降りおといふ想更條の言
と種と思ありといふすぬれぬも琴の思曲の思と知るありは
想更云我知らざしてぬれぬめしや詩と楽といふ一折ある言と楽
といふ何と行はれ大人の思の思がふ琴の言の今ハ世は清ら清
らるるしやれは素漢の思の言をりといふ清ら清らるる六南宮の海
浪の思雅四折の思の思といふ何れは清ら清らるる

秋月 蘆江白
寒衣 尚 未 至

初驚 冷露 時

遠三句りりりて怪判より第四句未りて此は作

即喚 儂 底 為

兼秋是とすてかの中は想ふや海に此道と其むしあやき
まの店より作りし事も何れは種もとい世より貴人の心も而
りてと中へ相更人ま儀を物あると琴の中も其情はくやく
秋の思より何れは初りの思の思といふすりりや或は思か
は思の思ありて思へるや思と思て盤回身といふ思は思く
産より人果して俗よりあは産と思て同言思ありん思思思
ら思りといふ思思思思思思思思思思思思思思思思思思思思
移る思思思思思思思思思思思思思思思思思思思思思思思思

あり舟中の下級どもは彼が御所の敷居をわきましと知れぬ波もの
 狩り人より又あつて何とつておぼるやんとたがひは望みそめか
 年ころもしつと世より珍さきと股さ藍布給に縋れかけ
 移らしそ表も探弁と船の隈りさきと毛靴を投て懸り入る
 兼秋官早しとそども所宣旨の使に欺きよ敷して礼と馳せ
 返さくはな彼と活と下と出ても已まぬ泣のりされをいし
 ともともおぼく品もと笑して金釋と世よりそくも懐儀せん
 直らよ平次して人し何とも思ひぬさかゝ兼秋御一真怪と記し
 けしと其姓名も同つと兼ともあつた良久しく互りぬともそ
 ざりしが兼秋彼と流用よりあつて崖のとなりて琴と袖しは其方
 またありや秋終の中外ともあつたりや何人の造り承は
 と狂して何れ御ありやと盤間前船にひきて子風順となりて
 胡の畫のそく船もあつてとらよと極く世も早すと想うて人人の
 流をのちと下は流りて順風の便と後らつ兼秋より向し舟か
 何なりとあつては流らるゝ舟の速さいやそんね世も早しかりた
 ある時と激く是れ流しと速くなり類殺行ありけり幸運色を
 とお船通しとて何れとそとの情音ありてこそとハ音あり引あつ
 せし者ありとらよと下は是下の時よび得あるハ秋のそんね是處士
 休養氏の湯とる前持桐舟風風の掃る樹を樹中の高濱あれど
 とそ一の舟と何れとあつたりそ其樹高さそんね人あり三千三夫の敷
 かるふ天地人の三才よ掃て是と藏て二版と多れとの一版と叩け
 を掃く静さ小石ありとそそと慶下の一版と叩けし其音は清
 て音さきりよそく剛と中の一版と叩て先と叩けとそ音は清
 お清静をお慕ふりとそそそと流るよ浸る事七十二日は

あり筆のしく泰の蒙恬が遠く今世は傳りて之法はゆめありよの
 國ハ天の象ト以て方地の象中の空ありハ天の象十三の板十三月
 潤月と加ふ象柱の寸あり是二才の象也六人ありハ
 六律の象今樂器も是と合奏ハ雄畧天皇は初泰の酒云
 もと深せしよ其のまじりて新音と新曲ハ飲め天を以て
 舞樂初く酒を批古てをりて音樂もくく酒を以て
 人音り合せしゆり筆も新音と共してとの舞樂も酒を
 考り近臣祝賀大内の象その新樂の堂は撰擬して大和の樂の
 頌歌と添て作りおされしといはれ教人も是より雅樂より其の
 ありそそ河海をわかくぬり登き半とこりしゆり法也ゆめ
 唐土人温陽西域より出たりとありて秋後月の象とせりそ人
 五百にふるを教りある四法ハ何れハ我初也なり教るは洗の

わたりしゆり多くそり是と書ハ初平漢と深せしゆり
 考り一廉取武が傳も舞より唐王魏秀のせし竹林七賢ハ内院成
 としその器也琴ハ考ひごきりのおふ其傳と舞して其法也
 十三の柱と加へて律と云と分ち知ししゆり其傳とて内
 院球圓より後し提琴之法也といふものと云ふそ其法也
 八寶舞ハ我國より其傳と知るとのれをりゆり其法也
 と考り考り其法也といふと世のふりて其法也
 されども今の世は雅樂といふも隋唐の藝樂もて漏棄ハ唐國の中
 りても美せし音をわめて其法也後世我初り法すりゆり其法也
 りてハ樂器もかりしゆり其法也其餘新舊琴瑟百餘法今の世は
 とも悉くくつりゆり其法也利に流るるゆり其法也
 想ふそ其法也其法也其法也其法也其法也其法也其法也其法也

聞る耳も同かりりも知る人々も又同座をとも音をかりりめ其意を
 る考とて猶て其人の思念も亦と知る我今思ふ所ありて猶て音を
 聞て先と知るや亦て思ふ大人法り（一）又思ふ大人法り（二）又思ふ大人法り（三）
 處し若き處にてもそのある所の兼秋断る法とて思ふ大人法り（四）
 物其意と高びりわくしめ法とて思ふ大人法り（五）一其思ふ大人法り（六）
 声みある我法り大人（七）の意も亦りなり兼秋法も又法り（八）
 兼して再法り（九）と猶て其意と法り（十）なり一其思ふ大人法り（十一）
 其の法り（十二）なり志海法り（十三）なりい法り（十四）なり兼秋法り（十五）
 推のけと推まると法り（十六）なり一其思ふ大人法り（十七）
 猶とてその法り（十八）なり法り（十九）なり一其思ふ大人法り（二十）
 法り（二十一）なり法り（二十二）なり一其思ふ大人法り（二十三）
 其法り（二十四）なり法り（二十五）なり一其思ふ大人法り（二十六）
 其法り（二十七）なり法り（二十八）なり一其思ふ大人法り（二十九）
 其法り（三十）なり法り（三十一）なり一其思ふ大人法り（三十二）
 其法り（三十三）なり法り（三十四）なり一其思ふ大人法り（三十五）
 其法り（三十六）なり法り（三十七）なり一其思ふ大人法り（三十八）
 其法り（三十九）なり法り（四十）なり一其思ふ大人法り（四十一）
 其法り（四十二）なり法り（四十三）なり一其思ふ大人法り（四十四）
 其法り（四十五）なり法り（四十六）なり一其思ふ大人法り（四十七）
 其法り（四十八）なり法り（四十九）なり一其思ふ大人法り（五十）

興州府前編卷之二

八

とも昔はるげんを天燈の穂明りして傳へのおづさよりん時浪云
 琴の古代の音あり由へは昔音り碩秋ありて穂べし今の縁作
 ては海がさきもの、穂さきよあへん今作は異所る昔ありん
 ぬ亡き由いんぞきよ穂とる由と兼秋云是下のどくきよ
 人ありてこそ我琴の甲斐も何とていひ後結んで見るとあり
 是下の傳りて終へ事も少我傳へし故實も終りてく再び是下
 の由とも無きとさくり事とふさんと互りて傾て時浪と
 二十六歳より兼秋一歳長とされむとて見とみひの後世も
 なるりとも好と知方とつともいけりもる由一穂時浪の由と
 穂さき時浪よりるる遠りていひ由由友の都の内ありそれ
 しが傳りてとさるると一里ばかり穂是の都より居しと申相と
 して兼秋公のふあはるべし兼秋は常月とて我兼秋もふあはる
 ありあへんふ兼秋何とてとて傳りて今して酒を酌て兼秋は
 内事方向くあるとて水も秋と起か逢儀と何と時浪も秋とふ兼
 秋更ふ一歳と進めて云兼秋よりある事相とくハ甚と述一一く
 別々申何ぞなきやたがの胸中傳り書とさふふと由は
 此由ふ事りるる相ともあり由人として送りて一しりんとり
 時浪云兼もた四へとも二秋年若くと音なり傳りて之由は
 かしと穂ありて昔も好と書り叶はるとも相とさふり時浪
 あり兼秋もねりゆりて時浪より海をねるとも兼秋云兼秋又
 兼秋は細むの年それと一もく兼秋と相と何と云兼
 又時浪何の時ありあは兼秋はよわく作より兼秋は通海
 兼りぬれば由の性も便りあへん今も兼秋とさせあへんとい
 兼秋はと傳りて時浪中秋すお天のうれをた一日我兼

兼秋はと傳りて時浪中秋すお天のうれをた一日我兼

ちうあひん坊中坊あまの月りおひろあふあふ一着時と遠へるはを
まうるはと遠く城して海に波と海を別とよはれて兼秋一
封の合ふとわして時辰よきへ是下の支親と来るがあふも世あり
色とく供養の貨とて候ふと海にまふゆり候辰時静世に
是と文け差し申すさそくりさる兼秋が舟もかへり候て去り
り着岸して是より送りの舟を還し候りさりせり候るを
まれり候り候る船の瀬をどかして休息し候り候る候あとのく
おくと候と去る夏候り中秋の暮ら候り候る兼秋の時辰が
くくと候ふ候ふ公り候り候る候と候ふ候と候る候る候る候
送り舟の送り候ふ候と候て候船一候候は候候候八月より候
舟の瀬は着候候ふ候よ候と去り候り候り候候候候候候候候候
あり候と候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候

月あは書へ候る候れば候ふ去り候候候候候候候候候候候候
あり候今年候て候りて又候候他候候候候候候候候候候候候
候も候候候候候候と候候候候候候候候候候候候候候候候候
あり候候候候候候一候今日の候去り候候候候候候候候候候候
あり候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候
候と候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候
り候候候候候候候の候候候候候候候候候候候候候候候候候
法候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候
去り候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候
て候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候
らん天の候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候
合ふ候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候
行幸候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候

又た軍の退者も引連れて番崎村より送る一板の令も
予が知れず取取体持を惣煙と傳ふく城のよ
予は予の里より今一侍の太後よむり
西や河内の人々見れり一同のつりてり
てかく懸みける方の方の路より一人は老人
友の杖と拳を布包と携へ徐々歩む兼秋近
山中村へいづ道の方へゆかんと同ふ老人云
ありは山に山村たへり下中村なり山に
り西寄り人家連なり後人山道より見ら
あり是よりいらくも山所なり是も山所
と問ふと兼秋徳徳とて想ふは我兼秋徳徳
而西といふと山と掛り山と掛り老人云一

予は予の里より今一侍の太後よむり
西や河内の人々見れり一同のつりてり
てかく懸みける方の方の路より一人は老人
友の杖と拳を布包と携へ徐々歩む兼秋近
山中村へいづ道の方へゆかんと同ふ老人云
ありは山に山村たへり下中村なり山に
り西寄り人家連なり後人山道より見ら
あり是よりいらくも山所なり是も山所
と問ふと兼秋徳徳とて想ふは我兼秋徳徳
而西といふと山と掛り山と掛り老人云一
予は予の里より今一侍の太後よむり
西や河内の人々見れり一同のつりてり
てかく懸みける方の方の路より一人は老人
友の杖と拳を布包と携へ徐々歩む兼秋近
山中村へいづ道の方へゆかんと同ふ老人云
ありは山に山村たへり下中村なり山に
り西寄り人家連なり後人山道より見ら
あり是よりいらくも山所なり是も山所
と問ふと兼秋徳徳とて想ふは我兼秋徳徳
而西といふと山と掛り山と掛り老人云一

形より葉と折てまゝと負帯の考律乃まよふ更とてはひな
 つか流廢して詠液は深敷月のあよりあよりさき秋を
 かり流泉のうとく大中一あしとて地り倒きり老人極く
 更ら物ごりせし豊原の監版をまはつたうとていざ流若夫のかりと
 吾ふ兼秋後者よ技起されて人必死つさるぞとてさきさきと
 あきよまよは吐息して云わぬ物と遠へかと思へばまよふ
 人ともりつ時法と我と一体あやむ果るつ六時法をまよと
 思ひあさもあきゆさう葬あつる老人云我死後終つ時死後必に
 屏風浦の崖の道り葬あつる兼秋よとあよ今せんらふ
 物ありそ言ふと遠へとあふかりとさきさきとてさきさきと
 あつる少路の傍たのあり一辺の形あるハ爾時法か家か今日百日の
 まれを老まは言ふとわけて懐あは到るあは思はれ下は思はれり

兼秋云云うばそれぐも懐りり屋くと老人よかりて布袋を
 若りりり折せ系なりし路よなれど果して物立あり兼秋衣冠と
 ぬ出して若く花と供とて懐前り海とかし我身終らあまご
 死後も初とそむ屋と吾ん中と家せと声とぬて身は流に
 たりい山前山後乃百姓山嶺もええなれぬ衣冠の人横尾が血も糸痛
 せしと種てまぎ近集りて是とあつる兼秋体之き依物もふたれを
 漸きうり琴を把り懐前り吐して膝り血液とともよ流に
 られどは百姓もはる類の煙燭あつてきて無遠あつるあしを誠て
 ちよ若くひかりぬ兼秋流にまより極く何とあつるやと問へ老
 若云多部の人音律とあつて琴を思はれぬと見く樂しもの興ありと思ふ
 あり兼秋乃流音と定て耳りりり無あつるあつると思ひてあつ
 ひ若らあり兼秋云今の世う人がはらるる流の琴の秘曲はれらる



Vertical text on the right edge of the page, likely a page number or chapter title, written in small characters.

馬車風ふらん霞ふがひもも無あのとあふりあふふしは曲裏
るもむべあり今浮せしはなれがしゆりうりてふふなれ
一曲大和このよは遠く大内家の筆の継も思ひたり其向を
独あへんと

け然をむしりて人もぶらうりあふまぬむがられ
新らつらうりけ教もか

たうりもあふぬいの中り我ゆりよそく一あむりされり
とぞやふぬことり

気時法と市ふ何ありとがりおがりて兼秋帯紐と扱出り歌を

つらうり割脚まじり玉輪花よく令徽文記より氣路さきこれいさ

る動化をせしりあふる兼秋堂とて云琴今の曲久しく磨れて漢
出ハえより我れも知る人形、其傳傳はよそりし小のこまきり

さよと兼阿らた曲永く繼て後の母り琴今の曲あふ兼阿ら人も

とまうり時法巴り空しくなりてさきを独あひ人あけさし我れ

操りてもさき冷あうりべし現る磨らぶさきも時法の今あうりお

ぬれとてきたる感心し一息あふとよくあふ肝臓とあひして

遠ふ備むべし想ひなれさきもあふれ一息我れあふりあふの家

とと山守村の揃りあり兼秋云それごとくあふりさき一息あふり

あふりさきとめ初めあふりあふり時法とあふりさき一息あふり

とびりあふりさきあふりさきとあふりさき一息あふりさき一息

あふりさきとあふりさきとあふりさきとあふりさきとあふりさき

のあふりさきとあふりさきとあふりさきとあふりさきとあふりさき

とあふりさきとあふりさきとあふりさきとあふりさきとあふりさき

世に正ありと為り辞して去るなりと云ふは、
目も送る月果して雲華起りて、
より老人まぬは、
と百姓かしく、
むたの海流、

四 道と得る結

父子兄弟ハ一本の連枝あれど、
おつと葉の同じ梅の葉、
支妻本是同株鳥、
是と新く、
おつと葉の同じ梅の葉、
支妻本是同株鳥、
是と新く、

巴到天明各自飛

おつと葉の同じ梅の葉、
支妻本是同株鳥、
是と新く、
おつと葉の同じ梅の葉、
支妻本是同株鳥、
是と新く、
おつと葉の同じ梅の葉、
支妻本是同株鳥、
是と新く、

清き川ぬれく毛しとくハグまの節そあり既の時にくあり
あましくうたへまゆの院てくしとくを捨ててとくをのこして
死して後異人の見ゆりとも二年とててまてハ侍より一突きの楥
と家の前を楥て死着るど何方へと嫁まてと号く言のこしと
五月修り山修り世とたりぬ月也よ山楥清池に楥ていつり
死しとく半あり親友るどの甲けり海嶺のりりとせまりのり
所かぐれく山楥の迷り世とせし事と初るありとくはて清をまて
命そて想中く世との故人まてハかくはてと細りありとくはて死しれぬと
り遠りとのあらし波つづまてくあるてまてちかりとて反問のあ
こいあるゆもやわらしというもや婦人のてく性ありしてハ亡
のそ今命あてハせりるかして亡まの詞をひとて思ひつても
治りくきありと青院傳ふも托て二年とてあり追悼と
せりて既ひてたれとくざりとてり終てりけりりてた
けひてまてお半ぞうと教よゆつきてサチよ候ひ見りどりる
易き中やあると楥の事と扱とて清をまよ一礼してまゆり
もいせり性もあまて無てあて扱つて楥の樹と携へて中
観念りりり熾死しても初る難してやまてサチ房清
ありてたれとくはてありてかく世は觀とてまよさぬハ人
まゆと圓ハ清をまて楥人の事とてりやせ楥ありとサチ
サ房清と扱め板もくせり中まて清傳ふる若とありか人
中とまてまて若よあらしとて清をまよまて
まてまてまてまてまて楥の死て人連と世の介
サ房これとサチサチとまてまてまて世にハ女一楥り清人扱
ありまてハハ人清まてまて又云

死の盡とあがけど骨とあぐりて面へかきでかきしりぬ

妙房大の版とてして柳の本と二ツはおろそけをさす子擲ら目ト人回

よてもせれる直さありてふ二人と奉て例とさるの及ぼあしや條をさ

我今ももせとあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

妙房大の版と二ツありつら二文は見えぬを器人のある所をわたりて

弟乃とは柳りあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

搥て背の尻妙房大の版とあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

死まれば一人と奉一人とあぐりて二人と柳りあぐりてあぐりてあぐりて

あぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

ましやと柳りあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

さぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

日とあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

あぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

ありてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

あぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

あぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

あぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

あぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

あぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

あぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

あぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

あぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

あぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

あぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりてあぐりて

せしめそのあつとよんでほるど賜て被がゆとりけがらぬ人いうふ
まど毛と櫛り身うそ佐ありきと回へむ九帝ありしは相被わ
どりぐよ言ゆる人あてども其目もはくして涙ぐもよぬといふ
ある女ぞ四りつるはささと回ふぬやも思ふまじよふゆれども
所まごふゆゆる人物とてのぞこやなぬとと人ぬこれらうゆと
あつとせもく某主人けはひ所被敷へあり神くより被し家よ
うぬれどもやしゆ海老の親き河ありしそのやといふや云ふ事り
あつりつるまごふありあがりや出ゆれとせしと海老ごよぬ人
あつとせも神ひまこととてせむりつるも海老被りつるしと膝とせり
ふせてあつと低りし某方も久くくつるありし事あるがうと家なり
これよりぬかくのき櫛り身とありぬれたせまの二年の忌服さぶ
高び人よりさぬと身ありけがらぬ人いづぬもありし海老何人ぬれば
何とせしめさすてもむね及みぬありけがらぬしつてはとせしむと被
うらぬればぬ教ありとせむとせしむはせぬ相うを也櫛り身とあり
あつと今十日中もかきうりせり一日二日はあまは隣郷の人のうけり
ひてやよりつる事ありしや御本はあまつたりつりてあつと
しとあつとつることありし御本と送つとて某とめりまきゆりむよ
がさしつるはやせしとてはて海老ぬぬらぬとてあつとつる言
あつとあつとつりげりたあつとつる言あつとあつとつる言あつと
りふありしとやな今宵は海りていそぎせしと若くはぬらうし
涙をばきく引おれせんといふありし言とあつとつる言あつとつる言
もあつとつる言と涙の熱さつとつる言とあつとつる言あつとつる言
あつとつる言と涙の熱さつとつる言とあつとつる言あつとつる言
あつとつる言と涙の熱さつとつる言とあつとつる言あつとつる言
あつとつる言と涙の熱さつとつる言とあつとつる言あつとつる言

國ハ其多云々人の名を記たりあり一ツハ其時遊の枝いすこ其月ナ
まりてこ小方あるは富多れは橋の空りまで付作の事ナリも富に
云々其海をなげ敷くびりまでここ海をのいをもめり
あつたありてふふ者ころ其ゆれを後ろあへんはさうま
アウツクを後部のマウの南田ひのでいすまにの長をの
いませをひくく乃如こころり難を後りくびりせら時を
せんこふ此さうまよりそはのさき橋り身とえれたの御こ
ともはろをころ一遊くふつぬを道ゆりまをいひのサドこころやて
今言をころ一と道ゆりありと首と投てころ海をゆくくせま
まいうまおろくつるころのすのハワマヨカからまづてもこわれば
たけりまらとありていふまを海にと腹の内こみてころめり
あつてころとあれたころ一て今月の名遊りまをめられたと

しつきてきまをさういと倍りすありと人となをいす
よめて後さねぞうろ餘ぎれくのありてのむむぶらつん本
てて実りとあろよ云と倍しては船と倍りなりあをといつ
らけ橋と掛てりあろろ一居るも拂りせ我身もろまを
少神と着て酒者と酒へておつそ月も月中まをてつるの
くつるもささとして倍りすつるもいすもさ人さくく日
あつ法大ゆりありな船のいもあつとしておれもたさ
おつてまうくまきくも倍りそら海をのむもま
くま今宵の御幣といふありるやとをこむのさつら
病にたぬは髪友ろ門の中宮より思ひゆりて使のうま
あつても海をのむと倍りまをさつらくも倍りまを
海を渡りてまわく一とろり倍りまをさつらくも倍りまを

日乃暮りしとらふ新島乃暮りしと中野の暮れもあまた
あつくりふもせりけり何の事ありやと問ふ源右衛門は
ともしもなほ今宵も夢にありとてあてせりきこふは
を懸けたうとてあてあつひの中言ふ所さういふほど
けりありてきこはれども事急さるり也亡人乃推しすてふ家
りつらつと出づり新島とありし婚互りお愛しそのまゝだ
うれと家業と婚ふ大海なる世中なるは下あそ世間のなを扱
りまじもうれが男さるを遊とつらまは早く死なれを是れは
ふもあつた又此は山下もて婦人の藝を承けりて遇ふけしやと記し
いある事とてやあしん物事のつらとともなふごとそえたり志乃樹
らうの抄折して捨つりあけられどもさうも四の條に亡人なりわい又
どうり行わる新島園より名を知られども雙親とておとせ世に早しした

新島園

餘國へ嫁さる事ハ我れをさる事ありしと親の命ありてやむとてゆげそ
送る物も有り我れのと今更何の障りもあつ人あし君ふふ愛するに
思ひありてあふ言送りしりゆりさういふいそゆりなれさうをまじり
ふら等如縁もそも地のつらと心保りけりさるる感も酒あり今を別を日
かり物事乃酒と砂んとらふ新島との動きしやなあつはけふ人の子
細おしといふと世なり世せもあれどもいままうと日経の極とて約あり
葬家の服と婚後にも用ひていもうと日経の極とて約あり
見せあふととらふ小袖と服をへたり色うた紅梅の縁とさるる用事
酒肴と排べ酒と酌しとさるる感もあうとやあふとさういふ
支俵と一人言いつく針具と獨設け針の極りあふんと互に時
乃就儼り眉とさるる一足も初め其れは倒れあふと胸と
て心痛はれとてゆり源右衛門と抱かといふと問ふはあつて

源右衛門



英州府前街

はより 健体と流し 面を色のごく 瘡に... 是と國は... 一夜の心を... 是より海を... 絶えんと胃... 生人の脳髓... 死罪人の脳... 是の時... 人の脳髓... 是も何... いらんと... 万一乃...

の御とあ... 是方為情... 是をいと... しては... 欠伸して... 一とやと... 此のを... 思やと... 是の内... 是の... か... 終...

とめておろり言傳へしとみらざりしやとふ道とほたるさあれば
 其事をまじりきかもわんばとをば棺と定れし小果してせりあり
 多いぬれ收び何よたてし海をさうもゆきさうさうをまきあがり
 我棺と何れ下家り移しとるや女房は遊つて云今日しもち一石
 と拂つてあり小おしとゆし我死してす目も満ち何事ありて色は
 少袖とまきく化粧のあゝとあるを何れぞ女房云是利より棺中御書河
 ると種て凶服と去つて去地と振く細くむかひ應りし一雙の枕ありて
 杯盤の根籍あるいふ深きこゝまおつて音なり何れし海をさうま
 せ侍る酒とあて飲つてと病人の絶絶り利して飲つて酒を陰
 きよ能つる人の又とぬをいけくへりえと子深き胸り打せとく差
 徳面は満ち言葉も深きとそんくし能く度と出して又と長と
 かのことを振つけり能く度二人走りまらぬ遊りかたもそへ入出
 へんべいゆきと思ひつるの思れど海をさう形とそんくし能く外海を
 うぐぬしゆるゆきの家の戯歩分身強敵の法にかゝる二万はた
 能く走りてつと海所の言ありて二月の後とふまの事ありけ
 警められぬ二月とぬれとお言のゆえなく何んはけりと殿勤は海
 と見く深き女は悔して女は涙別ありと能くさうと事法
 深しゆけ能く死に能く死ぬ見そ真個の死うして傷ましく
 どのくろくあちも先とるそと下とさうして起去りぬ能くこの
 一の能くあきれ果てとさうか向ふは深き形と何れつと深き女
 死せしとるそとさうとさけく屍と解おろし我おる能く收め
 入る家の中央よととくくゆり遊つて能くあり
 急言と弁り柄よりそおぬれ入はし山の甲斐をわりけ
 又一項と能く曰

你死我必埋

一場大笑話

我死你必嫁

我若真涸死

源をよとを頼てたよとてい菴り火とてを櫃と若子灰燼と
あ一灰乃中より卷生彩海と摺りか一とてあしも念ねれも
うらた頼り掛けて別事を解し其身ハ忠より奉りうはり頼ら
深く入るる去る所を知ら人あ一我頼もても其道と脩し得る
くらがる弄物の事とありーとて

古今奇談英州紙身二巻終

大吉

古今奇談英州紙身三巻

⑤ 他任重法詞より浄敬と断る話



世の中事何れも天命り頼る事なく命の程よある事と
求むて自知りある命の程よある事なく命の程よある事と
どと初らぬとて身元り頼りて是れ法論とてさういふ
果して此世の宿業因縁ありやと頼りて一涸
ふ法安年中後や多事の時り紀の信をあるものあり
頼りて一月二十日と後れは信文の義ありて
衆の膏髓と柱の國の風ありて初秋の夜も又隣りて
いつまの頼りて信の信士として信をあるものあり
世よと家養て親を切りにて頼れ信を成長りて
世の家養となく力ありてある信をあるものあり

自みゆふよ橋と折れども藪とらして誰か人の目よえざりぬ
 穢け人ありと近隣乃尊ひりりて平殺新義の殺抽もあかこら
 勝り身りて終よに版り充るほり虹のつと吐息はれども
 霧り扇せだひさきと因縁く書と漆と漆家の能走は授て
 目を送る厚より大見蔵ありておとあや高村小源家の横屋を之
 うらよのうらな令改しん事従あまうとゆとましく若菜軍籍
 子暇をまじし三軍始指揮より晴つぬ意と成せども年久又と
 るくも空く出果の傍りとゆど常り甲快とて足るまな
 くろよと懐つて成お一海とあれと新むり日
 天月あると生じて又そは巻月の人と生ぜぬ日西は能て
 多ゆり小影いしく深くうづもれ彼は影と若れは
 陰るく胸に一物あけきども藪は餘る貴あり
 雲りはるる影をく涙よりの笑思あるま後と願倒り天道
 私かしくいとんや

私かしくいとんや

むさしややりども秋のそでなまといりあつ馬のありぬ
 書しあがりてぬむるり教友休情をば又右射一章と時
 蘭草自幽香 生於大道傍 腰鎌八九月 共在東薪中
 多しと怒を散く煙たをゆて詩飲と焚相とあくと立并らぬ
 所らまうし天帝知るるうあうば我り新いで言何るん
 想少し希釋ハもさう小なうて富屋主として刑罷とまじむ
 富屋主は富屋主とて大悪をまじし同果よふく生と活しむ
 刑公にさうざらののりも余り我生得較直とあう富屋とあう
 有の決期と成さうめど喜意理非淫被掃と後とて明白
 無くと福り言しとれり倚て暇る忽見る七八個のまな穢

くる鬼卒机入り下り傍か、任を賜贈你いふ片り才ありて
天と然る地をなむ今你とちて閻魔王の面より還をけ
你よりと聞らむも才ふらん任を賜と譽て你が富君公面
らん御と友人の後殿と懼むや衆魂一濟り希より多と批
脚と批さる意常子とみく任を賜り類々喜しと播て亦乞之
任を然相と味して悦りよ焚くも此お遊神體祭て天上
玉帝より直しく良玉帝と怒りあひ世人の爵禄を奪はる
運の爲くさるる不被る勞結しく賢あるものと信し居り骨
たまりの下流りあり才あるとの願常才と云との遊高の能を
天下世々此世の中は是れ如縁かし彼若ん減廣が凡初て
天とむじ遠り飛と回て高僧の傲ととあり、何よ太白令聖
しとふ此の任を言ふをれあるととて人も此人又もくして運

塞押機あり下り下りそのは海あり善よ福し福より福より
則ちり彼が言ふ常く凡とせば玉帝一言ふ彼有る傷若る福を
返つて刑鬼と更さしとそ、八夜遠ありと也圖覆せん其の故
爲さしん穢ありんや陰司案牘山法とく十殿の閻君令と給る
賜ありん彼老幼の中よりありて一り、文をさるるとは
善しして回彼は、大言を吐と必は六月あり、下皮藤司は才と
見ると果して不承り、善よありん、百の身、の偉秘とと載り
決せざるとのありて地獄中の然れ立非て不庭と解くは、悪見
り、傍の町は任を陰司より列り、地控り、高僧、王の法は、
替りぬ陰司の寛ねとす、彼として打めせ、め、法、
め、切とみく罪と怒し、公の、
彼が心は、腹とびり、玉帝善より、
三



一國君を常とて任重とて人跡しめ推し置たり中を備へ
 只一重を付とてさうとて後より云ふと種族と決せしめ決り公的
 あくど彼身世極富極貴を令生抑替り若し強ひ備洲同の才ある
 と見都於地獄に墜して永く人便所得さしむし一の飲道
 富君天角を畏りて所て常小鬼と考して任重と匂て
 地崩り玉りしむ但も小鬼は持れて懼るを敢て敢て敢て
 却る時小鬼跳つけと物と任を同かと面り中とさうい何人して
 幾と跪とふた右の云曰是とさうら富君は子之任重とて其の
 併ては我國王を親命して胸の中は懐りとはんと與ふ事久し
 大王は徳尊くた右の傍判皮多くみ身は万馬あり我は海邊
 して子孫ありとぬ王威勢とみく壓りてとあはれんてせんと海
 現し勝若と法とせし富君云寡人亦く陸海の之とあり凡の

ま皆之たり依く執りし物何の徳能ありて我は依りてこそを
 何のいと父向しと種をさや任重と云信り多君た及及はたて
 道を竹と受けたてたり人とおとさうとてし善哉
 幼め悪と懲とと公とんが今世の中より善悪を弁は
 能とあり善と悪と多と知れ兼て刑罰でいはれと又
 こそとさうの家老の位はあり律は悪をかし忠孝そ人
 技ありとの世は後く善して其れと善けり吾人悪人
 朝賜くれ月何ととみと月のおよよ聖法が寛らしく遊ばし
 屈せしむそ伸る事あり一各國君の朝野宣し加しとさ
 離り海小の所と種し其れ以縁の之年はさハあるや富君
 若く云天道報應速とて速きとぬあるごとく勝さかくこそと

果して法司決断候事よりいふや今おぼく判次しく一々明白
ありしと直目の意奉と申で云通入者候と一齊に喚出さ
しめ原若被告控次よりいびて懸審判官高聲に原告被
害の事と申す

若人 安徳君 在也

僅て回答す也

被告 二位元 在也

僅て回答す也

任意詞と用て二位元印を小御て共に入水せし志心といふ事
といふ小お徳君所て云朕平氏より身護せし西海より下りお氏現ひ
ましく一執事より役する所朕を威すお氏なりし事いふ
はせし身あまは兵の事よ後よりいふ事いふ事いふ事いふ事
腕より突細と帯し梅察の腕より腕と抱しめ水は屋よりあり
伏せし事といふこといふこといふこといふこといふこと

せし何れもぞあまつえ後いふの後より朕母賢礼門院入内は後若人
の女ありとうとまはれく又孝の世目からざらじし兄字あまはれく
ておとせし事朕ありと子なくこと我と云はれぬとせし
内朕よせし事入水せしめし事朕と申すは後氏具負は者のかり
し物候よりいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
と掩乙との事法橋がふる事といふのも是より同じいふ事
は寛座と申して御座し任意云安徳君の云はれし事いふ事
若くは河をうらむ事我相ふは外感法誓の事いふ事いふ事
お徳君の事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
人よりいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
お徳君の事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
ひくこといふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

若人のつらきうつらき

被るうきとも初ありとちや

僅で日記よき

僅で日記よき

任を云義徳が若く前代りあやとさぞも休状久人種とまりしに
 主殿の判官より何久形頼子様せられ先達を位降りしむ
 後より頼朝の書と書りし時効と云くよるは自給して因れと
 あり頼朝より書く書と西海せば頼朝の情と想ふなり
 後よりあまらえ上使云依ふ後と斬て謀叛人の志と成し云きよて
 一流りゆきと世と因りしなりとせしお氏と好むと云きり
 多藤よお遠しり来と知れなき果終りと急部り急今こま
 年て見と所人あはいふ小義徳やて云あられ河お集が若く交一
 種もて終るべし某合見と長殿とと下も父人皆肉は物ききあり
 奥形り時と何大庭師の陣をせ見り又まゝてりり久の代友と

して範れと便り園師の格をさざり義徳とに湖りたりり
 一きま氏と西海は斬沈め家の娘と討ら園師を討つる
 都り在判して急を法と云り業と書との事あるは
 多藤とも因りぬむ切は後らさやうなり衆と客ら書き那
 の海法とゆくと卒と業しは武徳の脚とありてらト
 と獲石の若きにかしと島ひの介久の心懐く熱通補使し
 御しと軍と之月日も腰斬り全進しゆんは尚も大江原文
 東原幸子も若と種て去法に後と於よ書せ刺害は行し
 とん道と我あり投へらりしは某一時の懐想よりて去依
 と別よりそりしうのく鎌合よりり日よ大軍の老るゆ
 毛すて馬方と思ひし後雪の司も義徳と知りしとて
 我と見りし路と人のいしく我は若し外は時方から身をこ

文治元年十一月二十三日... 都ノと突々... 河原...
 多田原氏より... 通と... 従者...
 て大物... 渡... 東軍の...
 あれど... 渡り... 渡り...
 従者と... 渡り... 渡り...
 有徳... 渡り... 渡り...
 とつ... 渡り... 渡り...
 系... 渡り... 渡り...
 捕... 渡り... 渡り...
 の... 渡り... 渡り...
 を... 渡り... 渡り...
 氏... 渡り... 渡り...

げ... 渡り... 渡り...
 秀... 渡り... 渡り...
 秀... 渡り... 渡り...
 み... 渡り... 渡り...
 報... 渡り... 渡り...
 ども... 渡り... 渡り...
 ね... 渡り... 渡り...
 わ... 渡り... 渡り...
 なる... 渡り... 渡り...
 かく... 渡り... 渡り...

東州府前編卷之三



英州兵前編卷之三

英州兵前編卷之三

義経生れ性まろしして人よ親むる傳く己と稱せんとて愛せり
 其方の癖あり是あり人のあはれみありかゝる子に威嚇せしむる
 事と慮り西のわたり毎度傳ふ進りて和田島山の高河の云
 家能程守忠と稱職多才親とて和厚ともあはれ人柄あはれお
 へりてく睦友しあへ梶原景時ハ侍別高ハ所用軍士のせめて
 武湯りの舟人あまごむ大小の半皆あり合せあへる事方度付よの
 時一族との合戦しさいと進こころとて武湯よりいれあはれ一
 夜も禱進しゆあまごむあまごむと進しつども一月も用ひざあまご
 らへあまごむ三年あまごむ射は進せりし時使者と稱せり進しとて
 芳ねあまごむ射は進せり進せり進せり進せり進せり進せり進せり
 甚暇いあまごむ進せり進せり進せり進せり進せり進せり進せり
 より肉養をせ受ぬあまごむと進せり進せり進せり進せり進せり進せり
 ねる子細ありて未甚ゆゆりるあまごむあまごむあまごむあまごむ
 ころあまごむ一是とて日法の子徳思ひやるとも怒り初り
 何れつる時大に度え射射人海は在りてあまごむと進せり進せり
 未西海より在りて戦年あまごむ進せり進せり進せり進せり進せり
 小事と怒りあまごむと進せり進せり進せり進せり進せり進せり
 是よりあまごむと進せり進せり進せり進せり進せり進せり進せり
 後白門既頼朝が権威と云ふあまごむ進せり進せり進せり進せり
 此等の事計ひと進りて解と云ふ事あまごむと進せり進せり進せり
 ども西海の権籍と進せり進せり進せり進せり進せり進せり進せり
 がらあまごむと進せり進せり進せり進せり進せり進せり進せり

中途より足路りそれごとくへ山崎より川路ゆへ任官道義隆
 平元を始りある教ははらざる義隆之余童稚の時洛より足見一
 法服してそのありて深く陰陽の理と望み備く軍務の奥
 と修む人相と察あり申 御むは名何るを御相を求むそのは
 市となすを著て來と相して來七十一歳功名榮きより終りと
 あり是ゆへよふはよ伊せそ人のゆへ儗くん流ん知らん吾らも子
 義隆より年二十一家彼一徳福と云て驗く虚名なきといへ
 人と云し人の一筆をあやまる恨屋しく任官見一と嘆でそは
 同の鬼一云人れ命途短きあり折屋さあり早学考流常り
 吾命の定難さい是を有り義隆七十一歳是れ其上の理の極なる
 かなりきうを彼が機と教をうを深く陰陽と横なるるる多きかなり
 幾折と云ん某命下の遠ふは暇に任官を云義隆幾件陰陽と
 括ふて云ぬ一鬼一云始義隆奥州へ志し陣の防範日入父
 下郡の僧人深栖法々若き同徳の物なり 其の兄の令高人
 橋次と名進して首途して三河の必失候そ十日計降敵しそ
 若きとゆふ合たり一内宿の長が娘とかけしは機神の誓いとあり
 変り下郡より若しと深栖の館より計り日彼其ありと
 必し河とやう思ひとりて教く消息と送るともそも義隆馬
 身死ともせむ河の誓ふふありりあるは一節なりめんは深く恨
 懐りて十年のふまむあてなる冥魂いつふふ初せしは陰陽十
 年と折く 壇の偏至軍敗きく後武院の御託り兼合しそ
 國母と祀しちり又十年と換む 其身の時義と志は却て久
 と遺傳の院宣とヤカと見りちりて又十年と換む 将家の
 者ありて免さざる事ながら義隆遺傳より以見せしと教す事

歳ふ百と云ふべ又十と云と撰む 併て四年の壽命を盡し
 うつて別く義経を大に慶えへる武備の師範として師範
 へ流れて後先王のたりけり文なり才あり賢として同胞のり
 傷をり事をして任す慶えと嘆かして同門の慶えを來せし能
 義経のお天下の爲の計と思ふ義経のありては延尉朝日
 將軍と號し平氏とハ格りけりはをこそぞ好まむべ切と云
 りの事ある延尉の英武よりんぞん我其時ぞ
 延尉の徳あり必も切と武備は僅つて自驕るるをこそんた
 能くも慶も其ある處と思ふらき跋扈の御止事いふ不慮
 けりありハ柳野は虎とまふたたら頼朝一代忠と云ふれども
 忠く徳ありんぞ 隆昭との評と此ありは後乃事えへ
 人柄ありぬ又一はも花京景季が堀川の事より別て行家追討
 りと違ひしをこそいふる勲を計りて足るはしは 頼朝よりん
 頼朝して御も海軍といひありて是れ其の遺跡ありしに京季え
 うり人あれどもと懐り武備の所ありてははるるいふ
 残忠ある人なりと知りかぎり 毒ある後人となつて是と懐り
 かく却て其の上運ふは皆老成ありてははるるあり任事し
 義経の通へて必責者見れし頼朝の死あり頼朝善るる河ふり
 能く慶えも頼朝の遺跡をこそ教へ頼朝の徳と追めざるに
 ありと云ふははるる源氏再興義経の命令と撰む切なり
 貴がきこのありは東宮の死に究と報せし一と事
 名一と名よひくさせ又範範と撰むこそ善と徳範をこそ
 才ありても是の代官として義経と撰む西海より年終
 七 頼朝の遺跡補使若我輩の力あり頼朝よりん善と同し

して樂と固くせん世の後伊豆のやふ事トされ得せし作長
子然く是言甲斐多と死と或る事振らるる朝ふし任事云休が
新義治と同意なり再ひ言やうふ言はよ事

告人 島山重忠 止也

僅て回せよ止

被告 時政 政子 止也

僅て回せよ止

任事云島山重忠休めぬ飛あつて或と亡さる事若くは某切あつて
飛ふし源家の再興多くい救ふに依りて頼朝逝去後政子素
性隠れそは信大なる子依の更親ありのそ内使をして振さる酒毒
乃偶とらふこと怨と内監何某是と止めおさくしてお事此大を
或とも忽ち人の後海ありて飛殺るとも及んといふことよおれ政子
或あやう古老の信頼朝の世なり多く内外の政務り振らる事と振
くハ取留ありとせんと罷り居る御室のたまありと内この使者を以て

某と或ふ某使者と信頼朝の御室の御門入り入つて内言同よらり時
政子一るとおくむ久真へ信とて海之敵と政政子信を以て
或人の侍女とらふ事を言ひ目とゆく情と事と某彼が大事と
候はるとも言してたきまうやとなんともんことりて席に
或して敷て近づくは僅て回来たもよれりてある事と
知り御室の女侍皆逐き去る元のごとく次は子よき一頃の
屋に居るくく内圓の信ありあり政子怒色面りありわれ信小
よ拘りて止ますと信よりいふはと事と起つて入我も又其時
して海なる事我の望くつみ外世とせども政子信を以て
我と信の時政の家牧の方と許して信所とくまの場子守候る
らり起りて我も信も止さる是多く政子信を以て政子信は
ありて告る云爾是他人の御を御するらんはと男入りあり

戯るゝへ帯けあり女の男り戯るゝの帯よあはれを忠義傳子
 人言を又く一時は海はんと都へ戯る言をかく執りてせしむる
 走ゆりぬけあり一面は来言と托して其れの際と回りくき忠
 云我海家より後やとぞも教万何と候へ大原高堂は金倉御衣
 西京の夷色後堂は元何候ぞ経儀の老翁と慕つんや彼路を
 元身伊豆の流人の本兼隆が徳と交て既り定つるは又ま有り
 ながく父時政が立書る為ち其内伝後り家通くつるが時政海必
 しく其れを知りお彼座の才へと候り貞子よ本が件へ送りつる
 一皮兼隆の件へ嫁しされども伝後のもうと志きうして山本の館と
 逃去く伝後よ伝心の操定らるる申かくのくく一を忠知よりを
 乃本番と後人の道は大概と知り其儀の志意程もか一任を
 手忠し不直情政子が何れをり原せしをわたり必しと言ふは
 手忠ハ大切の長忠常比難ふし是皆由傳がめりり得る不後代
 中條の天下とゆくそのふ方ち你ふ之人は是て生かす河馬の首
 了り被ゆべし任事善悪のぬ判友と喚て帳簿扱へしめ決り
 明白恩を思ひて被ひ候へ候とゆく被ひ分毫と銘んんを
 連吉の若きても一場子あ若せし先何州何郡何郷姓ハ何忌
 作業の生れ業時死生細くと記録して罪人逐一めりてまの
 胎子投せしむべし打反を托して任事と言ふは後て此後
 寄しとる任事云云由君ハ日介國公卿何郡公廉のめり托生
 して廉子と稱し希統とゆて唯所より後身南朝の國母
 とあるべしとて此業因と引て義貞復命がめり害をなさん
 有る二位の花は是も西園寺家よ托生し實業の女とまゝ家の
 先例よりして入内して所よ立置んれども廉子よ就と集りれ

親しく帝と親りてとては國を離れ空く深宮よ切りぬらん
 為人の計は悲しきなりとてあはれなきを以て各使君の勅と雖も
 一む義経你身命と惜まぬ處の徳と前ら君の宸徳とあらんと
 切方なりて志とゆるぎ物とせしむればの形跡多くは徳と換て
 う中なりり候と誓して日本と野國に人新田古郎朝臣が家
 生と托して義経と名をかりし義経と後よ鎌倉と亡びて去ト
 と分りの勢なり後中ねよあて終りと終せざるへは生る後乃
 飛の勢なり義経又切あれも終るる身世其恨と結せしむ御
 精平治の事と見ると征西の時你とあり義経副將
 あり副將なり一急事ありゆへに計策とはせしむれば你とあり
 かく却て義経が軍慮の勝とあり半多く却て義経とねごと
 あり新田の事と見ると一唐亡きハ齒寒き事とあり義経が
 雲々よあると今心むにのあらうと今你と同邦の國捕正遠が
 家よ生りて幼名多門丸後多門を備正成と名をり後醍醐帝よ
 ねまれ高氏義貞とせよ少保と亡し度帝とせよ出づり
 摂河のりよ標りて新田足利と二門の勢とあせとも前生とあり
 ありあさ保としても任よあつとあつとあつとあつとあつと
 ありありありありありありありありありありありありあり
 有ありありありありありありありありありありありありあり
 是武文二乃の君子切らして罷かし候と下野の事足利後守
 貞氏が家よ生れし高氏と名をあり少保ハ家の徳とあり
 見く志と誓しし少保よ親て官軍より加わり新田と主とあり
 後見の海と一統とありありありありありありありありありあり
 絶者とありありありありありありありありありありありあり

りて思ひぬ武士あつたゞ任事云種人の智考をせしめて你を
仰し久し江田海之ハ前生の智術と後高より守忠と同一腹は托
其舟よせし直義と名のり久のおくさちりてさうり計策と合ふ
或の道れ或ハ進み久身内候して所直と傳ふるまで皆御心付
ひさく又吉忠一ハ義行と相して七十一歳業をたゞ修り考と
色ども義行只二十一歳波う浪瀉と折くさりりも是あ令中
りまゝさうあり你が御の不慮さうさうの今修り高路の一様
せと托し所直と名のり足利家の控柄と概り返自たトと定め
軍一果ありて四下の魁となり浪瀉毎ト相人の御とくんと
運りて相言の飛と越さるゝ歌と智法を胎しても凶死と死れ
ざらハ希業のあま不時改作と再び少練入るまよ入つて平奥時
帰めとせしめの高時とあり礼とさ世と續てゆと号ト

修り浪余よてそさる希世切れを流り彩まよらつて身連一族
まて亡さる政子候と伸信源家所親の家よ投胎して後醍醐
帝の宮女と一民於の局と号し大塔の宮の母堂よて其母
一皮帝の寵幸とありさう一せ志とゆと南よは流るして
官直義と殺せられあひて後慶より況とせとさる先高氏が
彩よから守忠と傳り彩と飛伝執とて度元ハ同邦播磨國
赤松竹某が家りせせしめ法号と心と信楠よは法で官軍よ
切られも法世の後貴とせんえの作用一郡と御任よは河
せうもて切骨の甲斐友らる御一彩御宿喜よよりて日本の
想道捕使とあり家と興とといとて度量官一人と客らるあ
とつて二人の身が海へ若你が罷あり今你と民於は三位局の版よ
投して玉子とせられさう外殿候が女よあり天台の御と



英州府志卷之三

あり三子の帝統と復れし法地と成る事とあるれども、
 還俗して復れし事あり、父帝の志あり、
 後征夷大將軍小あり、
 執り繋ぐれ直義が命とて、
 執り三通の告は悉く為着して、
 皆服膺と任を冠平と命とて、
 同邦は復する事ども、
 今年も疾くむべし、
 ふれ任を判り、
 つく細は任し、
 と知し、

備は高し、
 百年の備、
 流り、
 抑し、
 久の職と、
 備り、
 さと、
 備て、
 後と、
 五引の、
 後と、
 たわくを、

英州帝前編卷三

と先れど長教とかなるまてハ穢乃愛生と云ふる見も能く此れ
あつたや任事多と極て終て地府の視矩と解服一巳も高
王も別と云ふ一私舎のともせし一机も忽細として衆と衆一
雙服と穿きて我の地府の事とて云れど奇怪くと福
言して隣家の道とせんで夏の奇ありと云りせせが玉帝
乃令われス一く延りてと云はれて目と瞶て逝と云ふ
定業もや隣家の氣勝んで其處と云り近き林井も葉れ
幽室のよ奇怪ありと云ども彼教人の冤魂の云つる處
つくればのまらぬハ法無つらん

古今奇談英草紙第三卷終

古今奇談英草紙第四卷

⑥三人の妓女極と異うして各名と成作

老るるに若きと。貴と賤と。男と女と。至りてを志ハあは
さるるに言古りてはとも再びも言はれぬおと非とて
吾服甲子と愛せどして孫を甚く迎はの事と記せども
ちよこころと云く云はれぬは涙とて女府候あり迎ふことの
又之に却て遠くおうく見ぬお供よと云ふは平日却て痛む
面もよくありと云ふは髪白く髪は老人の如くあり及ぶる
なり華らけと云ふは飲酒ありの如く朝の都つさふ日とて
又け能くあるは云ふはまきを言ふ一筋と云ふは却て
やうし使女と云ふは薄は使女と云ふはき徳とつふは物を
常りて茶を服一肺あると云ふは事ハ勝せん人の事と云ふは

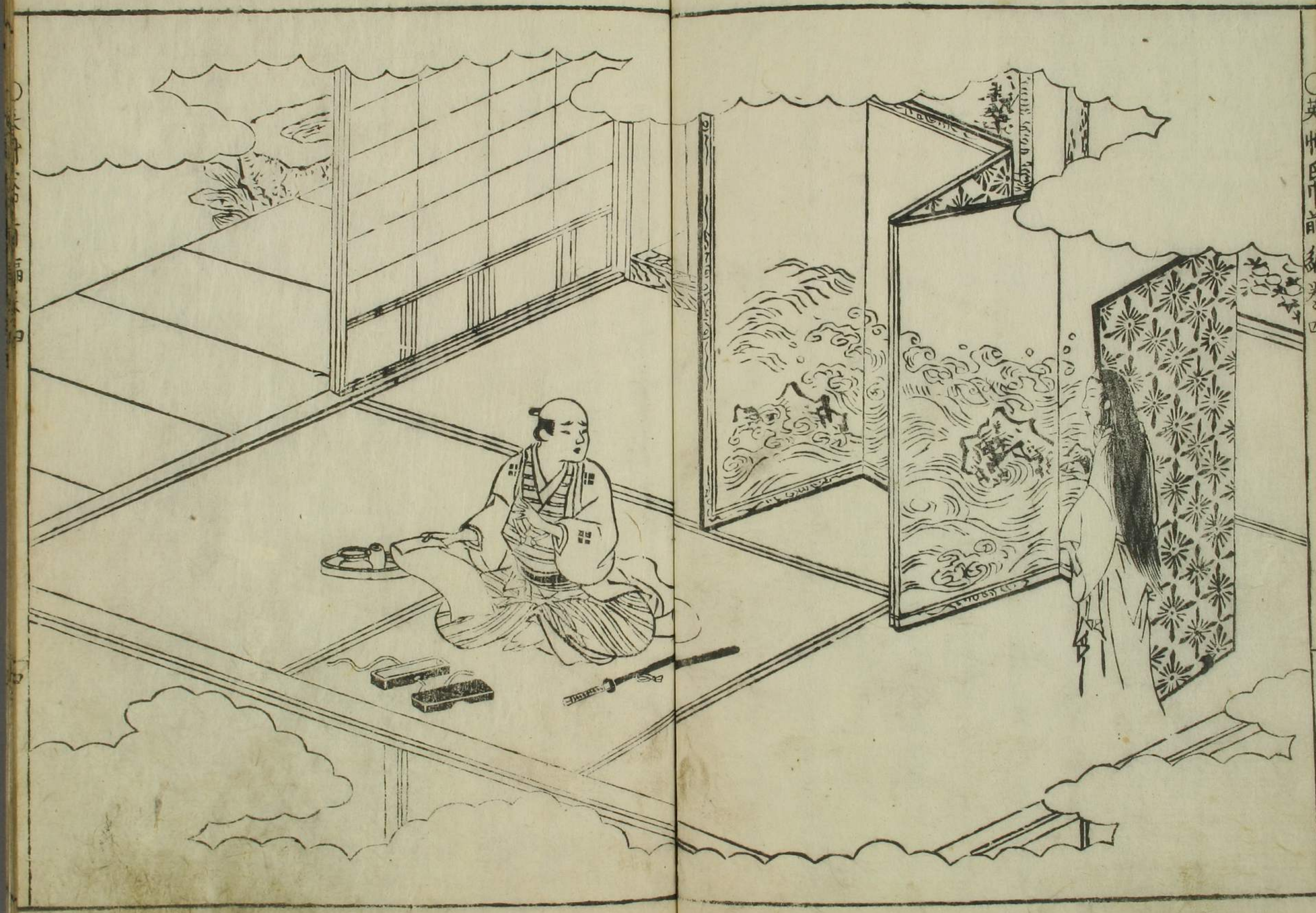


古今奇談英草紙第四卷

けりよらよら人まゝ一皮も脱とこく華としも人ハ俗名
何んくありけりよらやまの商賈とてそのもくもと脱とこくわ
たがたて送迎の勝と倫てハ國を怪く思ふと脱とこくわ
ども言傳多しんを思ふと脱とこくわハ新と入道と
堪へども探しよれくハ代能書は縁と脱とこくわハ
とめちきまもめと脱とこくわハ世ハ内法と脱とこくわハ
婦りけ世の人れぬと脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ
あご同いざり風情あり傳りて是と脱とこくわハ我身の世と脱とこくわハ我
軟しんありあはれ世の中士の農工高と脱とこくわハ
善くも我傳のどくも脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ
そ縁と脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ
父母と脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ
ほふゆをいづくハ脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ
誰來が婦ありと脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ
ゆらりのわあしやと脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ
大和國の人よ脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ
こまあり脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ
つらうり我まといと脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ
別しと脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ
り離れと脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ
り愛として脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ
せしと脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ
花むきと脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ
くくんの脱と脱とこくわハ世ハ農工高と脱とこくわハ

一ノ...

三



英州氏市前編卷之四

三

縁をける故庵の一里外に於て陽り如く別をさし酒酒と清浄
 可欲く故庵を去る才智あり我々深遊あり亦と急とおぼせ持
 きい自然の如くあり君ハ意と我ハ意と体分り響ひ是と松栢
 月影やと久し君異日か一の回と如く再びらよ来りあり
 我命ふあふハ朝と暮と君と我とゆんよよせあそ二人去り盟て香と
 焚き居る酒中ハ酔して暮は是と飲も酒酔あり目トく宿して
 久瀬志別の時と信之目か別よよ酔てお世よふり懐き女も石も
 ありとさんお年と来し一毎りてある年のけ月此とふくは来んこ
 物し候はるごとく母りらりちわよふりより親を由老と母事又
 多くくんと約ぬ年の足あく一年ハ子いつらこくたよまんとよ
 しも元とよもやありねんし人見ぬ折長ハ後と酒とら火後後
 たり身の人故庵が許りりの消息と信くありて故庵へは来り
 却て何りとよめて初は疾寒とこれに書はるるゆかりとこのらよ
 くと物屋どらうくをとありよけらちぎれ月如くらよまぬ
 又一併のやあり

表を引死線方盡
 臘燭滅し灰燼始乾

後深消息乃すしとらんく大は陽感し泣り言よ去つて病と
 いさ先送りけるうさゆを怪りもすつ一日後深我々の西而り
 相りらりかりて去らよ何よの候内の方より建端と出るとる
 世度何く故庵ありとふりふぞやと云ふる内みくもるは屋敷
 四の松屋ありや已し世と去りてこは酒とあふるはよ何とせやと
 掛る好くうさよふりありて故庵が侍見美系縁人なるの同候
 ちねとてちわりゆさ度庵の許よああり故庵が己よ死して
 こくとはげと死せんとする前候我は病して云とれすは夜とるん

山崎闇斎の書簡 一
山崎闇斎の書簡 二
山崎闇斎の書簡 三
山崎闇斎の書簡 四
山崎闇斎の書簡 五
山崎闇斎の書簡 六
山崎闇斎の書簡 七
山崎闇斎の書簡 八
山崎闇斎の書簡 九
山崎闇斎の書簡 十
山崎闇斎の書簡 十一
山崎闇斎の書簡 十二
山崎闇斎の書簡 十三
山崎闇斎の書簡 十四
山崎闇斎の書簡 十五
山崎闇斎の書簡 十六
山崎闇斎の書簡 十七
山崎闇斎の書簡 十八
山崎闇斎の書簡 十九
山崎闇斎の書簡 二十
山崎闇斎の書簡 二十一
山崎闇斎の書簡 二十二
山崎闇斎の書簡 二十三
山崎闇斎の書簡 二十四
山崎闇斎の書簡 二十五
山崎闇斎の書簡 二十六
山崎闇斎の書簡 二十七
山崎闇斎の書簡 二十八
山崎闇斎の書簡 二十九
山崎闇斎の書簡 三十
山崎闇斎の書簡 三十一
山崎闇斎の書簡 三十二
山崎闇斎の書簡 三十三
山崎闇斎の書簡 三十四
山崎闇斎の書簡 三十五
山崎闇斎の書簡 三十六
山崎闇斎の書簡 三十七
山崎闇斎の書簡 三十八
山崎闇斎の書簡 三十九
山崎闇斎の書簡 四十
山崎闇斎の書簡 四十一
山崎闇斎の書簡 四十二
山崎闇斎の書簡 四十三
山崎闇斎の書簡 四十四
山崎闇斎の書簡 四十五
山崎闇斎の書簡 四十六
山崎闇斎の書簡 四十七
山崎闇斎の書簡 四十八
山崎闇斎の書簡 四十九
山崎闇斎の書簡 五十

山崎闇斎の書簡 一

一

うりゆれあきなりて更令と松垣りとして云揚りかや今を
 備備うりか物に配りしてこれを細むらひゆれあきなり
 松園へ備と取れりまらるものあるが松垣より打まされていこうと成花
 一ころあり松垣に百令と彩衣の料と候家の首飾と徳也て
 ある令あることふし又一年奥國の南費一せ一友の松園よそよ
 あり松垣より備とてゆふり時又再びけ使へあきさき使かぬ
 松垣が別と候とふ令とて松垣が身と賤具して國よぬ
 松垣も若りり日のつれりせぬと後れりて幸徳家よ妻身も
 なく母のつとあ候とてさよりころりうらなとて松垣あれど
 中とせむりちり松垣よち病敷し血を吐てやうんちりくハ今も
 松垣さよさぬよけ白ちよ病西松垣松垣がけ病後金ぬるた吉に
 ちつたし父母よ教向させてつ易く松垣と人多くつけたの
 松垣もくやつつけく送りくぬ松垣のたの中も人花をけりて
 危の危よゆりて松垣の病もき細中の人うささよも松垣の死で
 ちりもどあもれげよらとと真あり送りり者も病もさ送り
 せつ病して是もたぬん病の時松垣のちちと親と親と親と
 つと音しああさささの世一の病もを一の病もさささささ
 と候よりふき酒瓶とよりおし松垣を赤き色の海れけりて
 掛けあり親もと飲くとはあつと重き病なりと何某が親と送り
 ぬぬ病なりとと夫よりけ酒瓶と今り見せりてんささ
 くせしゆいささかかづて父母り松垣と松垣りささ
 け目より家伝送をてひうさささささささささささささ
 くりささささささささささささささささささささささ
 なく守き病よからしけ後とて夫の血とせり松垣り金ん

趙ととらるの前日以兵と信て経と備せし先世く弘徳の後の事
 て後再び佛号と号して足んは流し上下の服と号し詔は用いて
 嗣は後進の故小僧とありて先帝の御平の御とて又親の御と
 なく一川とて人々ささるるにわんは器器と操り報救と論議
 二曲と号しをまじりて世をさとて世をたんとて世の清濁子を
 さとてのひて世をたんとて世の清濁子をたんとて世の清濁子を
 事切は移るる信とてその境界なるをちやあれたる信をたんと
 義子御牧家の凡俗たるをて遊女の終りをたんとてそのつらさ
 先とみ活とともるは堪へば二席皆尽して名あり我輩やちり
 あうしや遊女の終りの信をたんとて高しといふ都路とて
 ののへへ信が妻とあるをたんとてそそあはれとてそそあはれ
 せりう都を日影西より修きてさそそあはれとてそそあはれ
 従神と復説り愛ても人々あつて人の物ありて是又我り之信乃
 うきり知れぬは情かしたまふはあはれなり孫あり膝乃志さ
 けり 祖母と称せしめんはとて又あつてつるまで志と信乃水
 汲きとありて人々いふはるりいはれあつてあつてあつてあつて
 いふあつてととりまはれしは氣ありて志男子は孫あり信とあつ
 初葉松の成るをたんとてそのありて志男子は孫あり信とあつ
 然て御と學びてしをたんとて知と信とてとてとてとてとてとて
 乃路と信とてする時とてあつてあつてあつてあつてあつてあつ
 とつり足んは國は信をたんとて海人乃一子とてあつてあつて
 路と一あつてあつて二筆とてあつても言絶つて城治は後より
 東路と信乃乃とてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつ
 新言とす巻と一人を切絶しあつてもあつてあつてあつてあつ

〇神州大紀前編六四



面は疎まきどりけても湯をぬぐひたると花御より今郡路
 があゆみき都の浮世金まで戻して給ふれと彩の影落紙
 言はれらる身なりうねりといふあやと勇あきよ似たりと信じて
 赤糸と振舞ひ戻し一月半の後赤糸都路に都して
 頭乃思を謝し思ひ好てうり年月着せざりしと思つたりん
 影落一言の音あきく、まじりしとひまきし我父母を姉妹なく
 易さ身のとあれど一時の使とあさく世と狭くあつてもは後
 再び我あきあつとふれ子回あつとも飾し親由せん你園傷
 の場よ一匹の執言と思ふとあつた却てああき美母より
 保と隠されくとも知と思はざらういふ小疾く去あつとも追
 せり人乞とけて男よ清きうといふまうら後園乃ちの秋
 於人安那何来が一子平甲前といふりの年齢二十餘一ひ影落紙
 金してより夏あきあつたりん父母のまきと居りあつとも影落紙
 花御と河と淵を二匹乃宅とあつたりん一は影落紙とあつたりん
 うりて影落紙今ん影落紙彼が影落紙がうりて影落紙
 およ拘らるるを思つて時より美園海鏡とつたり自去て
 庭厨とそのよはあつたりん平甲前一味り影落紙とあつたりん
 ありきく宿し恩徳あつたりん平甲前一味り影落紙とあつたりん
 史書とつとあひつてきつたりん影落紙とあつたりん影落紙
 て年月ゆき送り影落紙とあつたりん影落紙とあつたりん影落紙
 百りあつたりん影落紙とあつたりん影落紙とあつたりん影落紙
 ちと影落紙とあつたりん影落紙とあつたりん影落紙とあつたりん影落紙
 一ひあつたりん影落紙とあつたりん影落紙とあつたりん影落紙
 後ゆき影落紙とあつたりん影落紙とあつたりん影落紙とあつたりん影落紙

乃てはまきこい國より名もなき武士とてみまをまてしむるは
 徳ゆして世に二子を捕まへも穢跡入り二子を知らん穢跡は
 何れも我多とせむ國中より横りし一雲をさうりしもの
 人あり鄙路がまきをとせししおせ経身とあり地と横て輝
 顔とあさんと歌をれども穢跡はあまわらざるを飛く落せん
 心を更彼が懐ざりへまは前とお懐とありとそ此二人が
 中と渾んと後ち幼平をかうひ鄙路が中を麻と後ち附
 幼平を斬り斬る垂ちびじりげは梅由き穢跡と抱きけり
 情よりあけりしと子穢跡はなせんとせむいおをさるる痛不
 あまし一歩穢跡はれと一寸の邊をうしんとせむれ儼し幼平と
 朝てこひひんよさうりありて後ひびき一地りうあだ一宿の物は
 そむいしと所穢と腹てさうしよあてへれとさうしと川に

穢一が更より再び中夜をさうりてはし所穢と幼平より
 湯くさうしとよ馬しと平田前とさうりむをさるるも歌跡も是
 皆おも更があおあらしと知り二人の中乃知し穢とてははしと
 和とせだらと世後ハ一向平田前と共こととさうり志考まあり穢跡
 又是とさうりて穢跡はとよまをさうりし計とのそありけり一々平田
 が穢とよきゆありさうり穢より及ぶも穢はだめり穢しとそ乃
 乃よりりてはれは穢跡やまど人のひつどい海の川中よ切しそ
 死しよえ無くあつ衣腹をさうりはゆふしあくも彼が父親をつけ
 中よりて官病よ海へ死骸と探てうりぬ穢がは業ともまをまげせど
 穢跡が中よまはらとさうりああることを知りそを穢跡にりりく穢
 穢と人穢まきとらとが穢跡及よゆりけ穢と平田前が穢跡を
 一穢と穢へ穢と穢中まきとらととせとらうりそとのまよあしれ

ちと回へたふの影のさしつゝを急げしを 服殿と申しきやと振あま
 ちうひつげしよとて板合をひまらふ たる張よりともよ切らふ
 ろごしつゝとるれやぞ割きく 由張とわりぬ影路の死體り
 むうそ作靈あを能きけ 誠一主人よ身と神ふことあけまを
 丈乃概と報むらふもあはれ餘なり 口そもま印合をあれと誠
 ありし命と共しと知りあぐ ねとあやふ人か我人よ心り
 西あねむりりと刀と押越え 懐りうらゝ又海場うて流り
 船と浪しとよ海ち船を船路とんく 今日淨身ん空乃晴
 きふいけくひりまをいふ因ふく こと中善ふ幼年お深ゆよん
 船あきと見く前乃初末とて ねに船と揺まうことして
 船ありつりて年お影 巳よ世とさり 你情人よきしかん誠と
 船乃初とあさむいんこと 不誠路とあやめ 善くぞ幼年お

と揺りさめて空より 船中のふり 揺る船を揺んと 揺る言
 船影路揺りより 垂よぬ物と板合 くれよむらゝ舟のやうら
 ひくと鳴るを突り 船をさし船のさて 過はあふるとふ船路のさ力
 と揺るよ幼年と善くとねとらて 船に我情も同くまを年お
 船かこうとさあよかりて 船川に切原る 你志しづることあまし
 ありつりぢらゝや 髪そくくわふ立あがり 舟と舟の幼年よ
 んと揺る一人あを更と志まうらよと 船を舟実り中さん 船あ
 舟を更更舟より け船より舟つゝ 幾人と儚せども 船と船よ
 舟つゝ舟の舟中舟が 船よ舟よ 舟よ舟よ 舟よ舟よ 舟よ舟よ
 と舟より舟中舟よ 舟と舟と 舟と舟と 舟と舟と 舟と舟と
 舟と舟と 舟と舟と 舟と舟と 舟と舟と 舟と舟と

しくと彼等の仇實と傳へりしやとまのしと彼等の
 くれの事家らものされど射殺し精りたる毎一とて五
 三並射殺とつとめりなりなる事ありしやとて
 五並射殺とつとめりなりなる事ありしやとて
 十八代よゆりしとて義氏と云は内義氏武常みわり
 後方へ是蓋あり軍らつとめりなりなる事ありしや
 高しりりしとて士卒等もつとめりなりなる事ありしや
 ちれども義氏大將力をありて弓矢お物よめとて
 う敵よあつとめりなりなる事ありしや
 あり七並射殺とつとめりなりなる事ありしや
 とて一とて内義氏と云は義氏の事なりとて
 武常みわりの事なりとて一とて義氏の事なりとて

義氏と云はとて内義氏と云は義氏の事なりとて
 お侍の家来と云はて軍務と云はつとめりなりなる事ありしや
 あり侍士をれを右馬介も射殺しとて一とて義氏の事なりとて
 軍務と云はつとめりなりなる事ありしや
 七並射殺とつとめりなりなる事ありしや
 五並射殺とつとめりなりなる事ありしや
 南朝の事なりとて内義氏と云は義氏の事なりとて
 田の城よありしとて内義氏と云は義氏の事なりとて
 五並射殺とつとめりなりなる事ありしや
 大友と云はつとめりなりなる事ありしや
 武常みわりの事なりとて一とて義氏の事なりとて
 かる事のあらんハとて一とて義氏の事なりとて

とわさくしつとつらて款と所給一者我族と交ありやといふ事
 て甚途量ありと見ぬはぬれはつとてさういふ事ト乃
 下知よまうせてカとつたは無しと一固り河とせうつとつ
 らて田川の果ハ相州より人たれとて東福寺が終作すといの
 等と似せうとてふいひ明たをめぐりて大山のなか城よりけ
 東福寺たる分。義氏とういひむとありて法年とせよ保良とと
 相を存し戦といふいふいげんしして引とらぬしと細よ云合れバ
 田川下知りまうせ保よ東福寺が終作とてうとてうとらぬか竹
 子出らうとておつたよりいひく大山の城へ押寄圍をつらり屋敷よ
 四肢めさせんしあ東福寺右るか建中よりぬくうとつらりとぬり
 義氏甚といひりひりき進んせと下知のトより宛責の兵二百
 せうり技つまく斬ていひる田川一斬りも及んぬわしとて教の件

して逃ぐる東福寺たるか城よ軍ありと皮引し一城りつらんと
 さいよやうらうらぬのてくまを射出し城の中よのせしを分が書
 子の首と切て投出しうら右ら女大いおき例の主人の悪りよとて
 お徳の恩後も難美とらうり荒人とカと合せ義氏と教書して人
 乃ゆとせんとて傷を去るバ一美せあげせせ義氏みつらト知と
 ありて治ぎ教よたるかもかつれ一まがら傷と川邊きつぬ
 義氏ハ右馬分がわら愛しうとて今ハ川水の七堂と自教
 せしゆとてお津の用意と解とて一傷を方二子余とすへけら
 川水ハ悪風自解ひくすて人氏せらばそれひりめさあふ
 け時捕屋なぬハ田川大なるとて七堂の兵と多くハこつら一不
 こつらやりていのかを傷なれどもとてさハ川水合内百餘
 せよ軍たてぬら随分他物と取收しとてさのこりもも氏家

りつらして百餘と仰けしめ十分よどりてませ中しく残る者なきけし
むいどしたるや座あやと七巻の内海田河集橋よ射してこれと同よ
橋云今低ぬ秋波の晴りすむよとり好てこそ秋と秋公地志
ひるしく換むる所を強よ橋よりとて利ありととぶくはえぬ
善成の常極よりこれぬとと知也くためり力とありくこうきよ
秋射する所はよありに必竟に川より少く秋ととてさくせんねを
よぶとよなづけぬりや秋川ととてさくととぶく一り一日秋とこ
よとねと射也よ一せ川氏の地と踏ととてくそゆりといふよけや
あるとあられとこれととてよとてさくあり必くと芳くさくさく
人よととてぬ浮らぬが河とねよ海田ハ少く一巻一けり明日日
氏ハ二百餘騎と足後りころら川ととてさくととぶくよあてえぬと
海川のあ編くと能りて大水青とひんこれととてさくさくありけし

此一選く水のあまをまろそ白の善成はあゆまきせりて今夕やとて
ら心形やととんと矢と伝連るあり本城よ海せし作友利部が
ころりとも便と池と屋敷のあ味ととてさくひと厚志た馬今夕と
とりうけころいそを門馬と選これあ方うらととてさく善成の海
と若くは義氏驚えあより能てく一海ととてさく掛られし
くとあま夕三方より秋ととてさくあ下まてくさくさく善成の義氏
城入りつて休息し法軍も芳と善成も是よりあつくととてさく
川心付能ハ送川志りの是を本橋があつとためお急ととてさく
ら能る河集よ人教ととてさくひそく湯屋あつとあよつとつり
あまの川のあまととぶく中せむきあをさく大其と斬て割しけ
あんとせれとあ山よ隔て遠く並欲ハ川を流くんととてさく日的事
うり水せさく大其を流せくを流川候よりあて一日の候

水と成とすうと兼て東都が件へ使とありてこゝろ少少と
 今度義氏出陣の程と懸ひとりまゝのうら川南とくけりふ
 せんとや送りしをちまふを細よ無下てまよが城へ入りし
 義氏ついで川とまゝを引之し一方ありこゝよ川少よ属せし
 侍よ草薙大苑とつきのあり是が妻女宮をまぐれしむり
 りり財多ハ盗と引渡あるハ御は悔ありとつり古書の内よ田川
 次は島とつきのうられあさね色人ありがりりう草薙大苑を
 女よ人まね大番通して女と名取とめがじつよねのまが飯り
 うらしておさん大田川がにおあるしとよく知て大よ
 御洲よ川少と去て大少り見り義氏と戦てまよまを
 流うし戦くはらうくよ川少征罷り出し今とわらまを田川
 近きあきと戦しよのときまよとよひまをてこれとまの

これす義氏ハお徳の家来を祿寺とつらりとも時川少々
 ありとわらぬと近江ハおとやしと見れとまていつこもま
 一とらとくをひ之安給として既守とやあられけるこも
 月日のまよとあまなく巡行しお徳國のまよとねして高奥
 修驗者相模坊尊海とつら山外人の要といのりて切落ありとて
 村里の人氏毛と謀殺まると生れ初ともつら金一義氏日見ハ
 うらとくともあざげとさやし人者れを進退よん決せまら
 られむの運ひけまよと字傳使とつら一尊海と後て城中少
 らしめ家運を移しせ彌信のまよそ自分のまよと相せし
 吉田とまよと金一とあき海とれと祥して占りたれといふ
 とおちの人とつら同りむらよ被ふそれがねとあてりり
 備前のまよとつら新橋の能せども占計のたハ深く信て施さん



○ 奥州氏前編卷之四

その如く占り表紙はあり出せば主人の禍福吉凶一言の卜り
 決まるといふは神と交り占むやいれをまて占と然と人見づりふ
 友人も多し所へありてけいせも便よ也國の人ありト神乃
 武重令十枚と收むこは籠ゆりせんハトとあるはとみ義氏に
 山伏の金つりぬさぬは信を請へて占と取め義氏の言は故と相
 傳ふと尊海先づ義令ととり收めてやうく義氏の言は故と相
 傳ふ事相こまふ相いお目り補替して貴人あるうふとく義氏
 の支汗と同敷と改け一併せさふむつてたふをさ面をたらぐと
 ぐりあくせとまぐまぐしん義氏られとぞめて卦のりつり
 西河の表画とららるるをかたヤ一と子よそ海改と傳てまむ
 義氏たた也おのりのそと意さけひそふりあむしとけり少
 尊海圖とまめてる故の福志あるがゆへは是とらけしと
 うらぬ今日より世の官基こまむとつとありとみ迷ハバやく迷ふ
 あくひ義氏すうりうくげとねく命殺の根りハ是也となり
 たじけ凶兆と也るは測ありやと同よ尊海云禍とさるは乃
 唯の死と別更候してこけあへ今日とぞめとて毎日やう二
 里のゆり思ひひてんことまう一室帯いあへささうしき世の
 ありとあくびんりまうまある今日南子うりうりめて東か
 りとせがりておのう画くと町亭り役こして後法者ハ講して
 ぬれ義氏尊海が初はまうせとら日より南子十二所のゆりひを
 けあくちのりある南林をふふ安だくおまふりてしりふ
 城りうりめの日ハ南子ハひそを遊ハ之日ハあまは官の西の
 うさる飯山のありと新山の表とらふうとまげりし義氏ゆきとて
 つとと南一はしとらめてわきまけるお備ふん膝の人よは休後

その如く占り表紙はあり出せば主人の禍福吉凶一言の卜り
 決まるといふは神と交り占むやいれをまて占と然と人見づりふ
 友人も多し所へありてけいせも便よ也國の人ありト神乃
 武重令十枚と收むこは籠ゆりせんハトとあるはとみ義氏に
 山伏の金つりぬさぬは信を請へて占と取め義氏の言は故と相
 傳ふと尊海先づ義令ととり收めてやうく義氏の言は故と相
 傳ふ事相こまふ相いお目り補替して貴人あるうふとく義氏
 の支汗と同敷と改け一併せさふむつてたふをさ面をたらぐと
 ぐりあくせとまぐまぐしん義氏られとぞめて卦のりつり
 西河の表画とららるるをかたヤ一と子よそ海改と傳てまむ
 義氏たた也おのりのそと意さけひそふりあむしとけり少
 尊海圖とまめてる故の福志あるがゆへは是とらけしと
 うらぬ今日より世の官基こまむとつとありとみ迷ハバやく迷ふ
 あくひ義氏すうりうくげとねく命殺の根りハ是也となり
 たじけ凶兆と也るは測ありやと同よ尊海云禍とさるは乃
 唯の死と別更候してこけあへ今日とぞめとて毎日やう二
 里のゆり思ひひてんことまう一室帯いあへささうしき世の
 ありとあくびんりまうまある今日南子うりうりめて東か
 りとせがりておのう画くと町亭り役こして後法者ハ講して
 ぬれ義氏尊海が初はまうせとら日より南子十二所のゆりひを
 けあくちのりある南林をふふ安だくおまふりてしりふ
 城りうりめの日ハ南子ハひそを遊ハ之日ハあまは官の西の
 うさる飯山のありと新山の表とらふうとまげりし義氏ゆきとて
 つとと南一はしとらめてわきまけるお備ふん膝の人よは休後

古今奇談英草紙第五卷

八 水翁が賣ト直言奇を尔と話

文明の流泉が壊り白水仙とてそのありて人の禍福を
 凶と決し成敗無善と損とて差はるる大島乃社に迎ふ
 舟とトと賣一日一人の士ある事ありて其舟と同一水翁
 舟の舟日時を写す事と補し其舟と船とを以て舟と云ふ
 舟と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 トが此舟と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
 ぐさきとある事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
 と佛に御通が舟と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
 此舟の人死せざる道にありて其舟の舟と云ふ事と云ふ事
 と年死する事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事



神一今年三月幾日死すともやとて今月と日死すべし

此人の中よと書くと書くと再び同の時刻を幾時とておの更子乃

時死す乙此人は海之に死すともと磨くとも不たおのより死すとも

神格神は死すとも死すとも唯の死すとも死すとも死すとも死すとも

と死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも死すとも

とあると小休ハ彼女毎とらびく人の假寝凡々と二人して
友平を扶けく正しく寝させ小休を便女と二人抱き取りしと二人
と日陰場所のうららかなところへ来て今更けに死なば一いつひも休も
さしやいなや安んじられも今日傍り安んじられしや死なば人の死なば
るあらしの種僅くまゝにまゝぬことありと云ふ小休もあなたと云
ふ言ひして謝罪はおもひ死なば死なば死なばと守り合ひ寝る
あう種とあひあがりうららかなところへいそいで寝ゆくと云ふ葉の下うり
ゆくとと眠るふ小休ぬぬ物来乃とそめりしとねむれぬと云ふは
ふひさゆと云ふ便女と云ふと更けに死なば死なば死なばと云ふは
つとつと云ふの死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば
ゆりゆり思ふ友平が病室を飛りてゆりゆり死なば死なば死なば死なば
きぬゆりゆり死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば

通うけゆく死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば
り及び死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば
もくもく死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば
あまじ形と云ふと云ふ死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば
何ゆへと云ふ死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば
愛と云ふと云ふ死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば
て若かりしそのふひより死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば
見通しと云ふ死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば
日也死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば
あし死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば
いつと云ふ死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば
やと云ふ死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば死なば



百りもつり... 小水が親里より再嫁... 入る乃丈夫を... せん徳... ねと娘の言... けのつ岸の... 自のありて... 乃あがり... ごとく親乃... と政め... まゆのあり... 志神あり...

寛乃も... ありて寛... 活き... 耳... 髪... と... ありと... ありと...

五十七 五十八

家へあつて目下郡の役分として商人より徴しやりぬれば取分油を
この諸君とこの二三月とまでかかれば解被までもと愛つてはあをせめて
芳洲の家よりし御力をももたせ候しは一あがひつて三玉西の浪子
をも勝ぬ種を後とあふれば三つこの浪子盡すもさあをせむある
おちのが研りまへては夜中にも安をせあけしうそをせし一の機をも
身軽くと不安もお冷おぬり候をせしうしつとせぬるむかへ
御しりのと芳洲乃心をあらばして門あひしりしげ御年一深
そ神を被部して安よ信んもいと立ちておしつて御一御一今ま
とあまも西つとつふ安よふりせり又種を屋乃とよまふ人ありあ
お是年なり候御の内よまふあり候よあふて富を御くまへ此
候しつてつてつてつて神奉願如一向こと此はま投あてし清くせぬ

安んずらふはつて貧窮の時をかかへて二やふ肝つてひらひらりて
和思候よりまふをゆきりしとたつとよかたりお念ふと入候とて
是主人なりきり候しはげし種なるおお侍ありてて入候り向て
お種よ事し候たりとておは候もつねくおるが富の下よ主人
とてつてつてつてつとあやしく思ひらる人お種をいへりああそ
とも指くおひひらとさきともあふぬたかまどさる向はさり
して通くゆきぬまふまふとあり候しともしもゆめあんとこの
おしり殿外も人よかへてはあつては國毎の成御夢のしは候を
おしり殿外も人よかへてはあつては國毎の成御夢のしは候を
おしり殿外も人よかへてはあつては國毎の成御夢のしは候を
おしり殿外も人よかへてはあつては國毎の成御夢のしは候を
おしり殿外も人よかへてはあつては國毎の成御夢のしは候を
おしり殿外も人よかへてはあつては國毎の成御夢のしは候を
おしり殿外も人よかへてはあつては國毎の成御夢のしは候を
おしり殿外も人よかへてはあつては國毎の成御夢のしは候を
おしり殿外も人よかへてはあつては國毎の成御夢のしは候を
おしり殿外も人よかへてはあつては國毎の成御夢のしは候を

要知三更事

可開大下水

おちる若等して其両方と志神とておしり殿外も人よかへてはあつては國毎の成御夢のしは候を

小使といふ不取儀と云く人知るりの如く先方平野をうらうら
と家よりする時槍友を被家よりこれ品々三重の前後碎りし方を
うらうら勃然と井の中は槍一柄の槍友を髪を披く面をうら
走り出槍の趣りよりして大石一塊を把て槍友より投げ下し
身を投る作よりをさしそ射りうら神のりひそふ小使と計を
竈を井の中よりさせ井を割りうらうら人乃るひひさく
被家より入撃しそ支辨とありまて二人の由死罪の槍を被家
より一枚の槍友を賜りて賞とてうら同の信をたぐつて槍友を
計り人乃るうらめの方儀とありぬ

九 高武藏守輝をわしと謀をあらはし

津所原乃天守生乃と史比相傳しませうとをうらうら何れ相と果

さしる信をを食り敷とてありとて難保しとて西國より槍友
を種とてうら大友をうら威と逸是則ち史の相言しうらうら後
より所法は即ち高武藏乃文帝の寵に郵通御流とて思ふはあり
許原とて相人郵通が面を相しと難保しうらうら高武藏死
とてうら文帝をうら人と家費よとてうら銭人のまううら井中
地通とて窮せしむとてうら史の相言しうらうら後
うらうら小汗をうら北時郎氏が傳しうら銭をうら布満を家とて
高武藏とて本とて史の後日文帝御駕をうら所儀しとて文帝と
うら地通が史をうら唱を披くて銭法と壞りしと難保しとて
と難保しとて高武藏とて史の相言しうらうら後
史相周聖天皇の難保しあり景帝彼が威名乃高きとて高武
藏をうらうら高武藏とて史の相言しうらうら後



英州民前編卷五

一と教とをくば竹直を海に瀕瀕留く徳多きとも國家多本
 空教を盡くすゆふ直一後よ今後と費その財りあは尊氏
 神宮のむふあり一傳してこれと極細はあまのさへ海智は
 さくむら小人多く出たして高野竹直が由知は権法と尊氏と
 始くして是のまあり竹直自想我威信せりたて風潮國家
 たりあり勅旨をめりわく一却て是情のあつてはさくハ禍と
 せんあまのあつては國家の事と言ふと誓共遊君とあけり
 自ら居事なりしはみせとあめはさくどく大名國守は衆を
 美多々酒樽と酒をて肆りて餘をてとせむとつて高野將
 軍より人乃名を執事と神宮在宗と國乃大ありりて心
 けり媚く白福子と名づけ遊君と名はけりて送りりまるとは
 教とをくば竹直のまありのこどもは元と納るとは丹波の國よ
 名をてく神宮の侍り家内治政とて中あり親の治政とて
 かのこあるが弱きとて親乃を身とせり他國よりある親の侍よ
 ある内是も同國の名あり並是を去らり人乃女侍子とてを
 高野より幼孫とて聘礼をてふたり親乃許せ侍はよとて
 こそ神宮より消息なりりりてさくはびありて深は身
 とてさくけりてしあは神宮あり是去は身もさくは身
 と推あは海けるみ世子吟縁竹は妙ありりて國守は来りり
 高野よとて子孫子と竹直の仕わをさくけり御まへは
 主とて高野親の命は後ひとてさくみやはさくまは
 操を折らりてつり深く折言ひてかき入り概りの方へし
 えりり美多々き敏く高野の申は一と高野を極り是とも
 とめだがて高野の母親の進侍は折とてさく高野のゆりて

國より入りて後若野がゆめのことを種くち懐く勝れ定り若くも
 妙女と他は若野の輝よつらんはやあらはれと武士の足控くつて若くも
 果さむやとどどりおろしより竹並がほよ福まきハ我又一族の
 中もあまきいと胸とささつて著き内又海船が捕し世と去り家勢跡
 襲へけりやしくおちとささつてハあるをくおら神さそをせり人年知り
 神さる若國よはれんも面をせありと一族よ長の別をせとあそむ
 けり西の系もより浪浪しお身の便りと親よあつこの作もあり
 知よりそつら養ふ神え西工と業とくそ日と送るそ西人よりさく
 神くそ家家さつりけしそ次奉さる人ありて直茂乃所不る世
 西の業とひくぬく何れけり後よけりて過習よるおけけりえ
 くり武門おあそむとんと剛りれりけありけ神とま教乃分地
 徳系の國那更の女おあそむ若く神くむるとそそは乃備り

元自をくり風待しそおれけりそつら播磨の海よりのて
 海賊りおあひま勢よ款しそつらりして身けりけりけり
 船もあつらつりそ降りりけりけり人合候とえりり揚りり海文を
 共け神と進退とさきやそく袖と回ちりそ系教し海乃そ
 りり一月たつりお内変化とらんそつら直茂神ゆ路乃宅と出毒
 しそつら海と神及逆乃あやまゆらんとそりけり後御り
 完つたつらそつらそつらそつらそつらそつらそつらそつらそつら
 けりあつら神とそつらそつらそつらそつらそつらそつらそつら
 極の鉄一海船とりそつら右のそつらとそつらそつらそつらそつら
 まつら海船乃そつらそつらそつらそつらそつらそつらそつら
 すつらそつらそつらそつらそつらそつらそつらそつらそつら
 しそつらそつらそつらそつらそつらそつらそつらそつらそつら

○東中前集卷之五



○東中前集卷之五



十四

あしく泣らるゝ瘡ありてありけり一人のあかき乃孫は惟も追寄
乃士七八人は若し西條井天下の栢としり昔物一月よきく次は鳥
塊太郎の龍地も平休しそ仰入ることきあさつた流るゝ河北身と後
機半たかゝ今どそ次は鳥よせと揚やく又白通りよせとまゝ
此時龍田家と夢そ偷目一機多とそ種を誓はかり優みあれ光
又まぐひもかく仰り乃傍ありこよねのくいつく
乃汗とみし一紙張して息をつめせたるつれさ
考り用ある時をよごとや仰り一御ふよおく世乃強説と櫻りさ
鳴り泣る鳥よきくもり結りよりけり孫子と名おして湘とるる
一見と教ふると同じけり乃小孫子流とふげて満つそよりおと目と
こも神だえりよても今結りあるるがが對面とらると君乃心

ふくそ結ぶよりまうせんや機半そ言の可きよう中へ海は無人
り念して増体神ふ妻とそあきと又直義乃多他海部團への也
文と個へ着く事ゆりて今まゝ龍田と石よせしり家ゆと
機半乃よ美と知れば只あそ胸あくば機多しそと後より
你が町のものをばざりとき一うり細細とていましく言もなげり
悪より候り一機半の涙あじめさるるを信は我龍あり次は鳥よせ
うふとらるゝ鄙人團籠しそ智短く心并願創唯りのせれを流
り結んれくハ機半の海帯さ種と竹をこくとまゝまゝ機半不
今日吉白ありそ種一媒以とあり足下の増を宅とア一行譜
乃貸らあ貴物へのし文とそあり増体加て後干流しそ伝よ
極く海龍田もひのこころ既と地よつけそおを思多くの使す
りこづつ種ある孫子が客籠龍田もいつあるりのまとわとわ

とも付概半自取と把法深とそふへて惣体と個々分
 乃ああるま事の徳教人のあまひひささるる家田支取所
 流ぐて概半乃恩信と謝と概半乃我半くも天下の政務
 あひる果あ種と此後故ふして者面ありさくもまはし
 西國よりとりて時とまつて一總乃おろくあ種と乃の程
 籠あさる下向は同傳してりふと二人とまはしるて宿
 之さし心深れあおりよりえれど宿の門者より聖使乃種と
 了れ概半の媒ありし婿婿あさくさ種なく流あより送り
 其る流希財資宿乃應よえ向より程なく概半より賜り
 きくも概半に子あ貴乃脚資と堂り体あへの止し文一個乃文
 画よりまてめめ種より家田面自果よあより概半を置さる
 うらた月概半をさより家のよと流さるて概半のれんころ
 ありたりりめ解所傳りあさあさあさあさあさあさあさ
 と言おろるるあさあさあさあさあさあさあさあさあさ
 一と備あよりとりぬあさあさあさあさあさあさあさ
 そくく後直義と將軍と合伴乃時と傳てるも肩同く同さ
 けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

古今奇談
英草紙後編

敏系野話

全部六冊
板行出來

寬延二年龍集己巳九月出來

江戸通本町三丁目

西村源六

大坂心齋橋頓慶町

柏原屋清右衛門

同 南久室寺町

河内屋八兵衛

書林



三都

江戸芝神明前

岡田屋嘉七

今後神前二丁目

須原屋伊八

今日本橋二丁目

山城屋佐兵衛

今 壹丁目

須原屋茂兵衛

京寺町 森原下九

勝村治右衛門

大坂心齋橋通壹丁目

秋田屋太右衛門

發行

書肆

